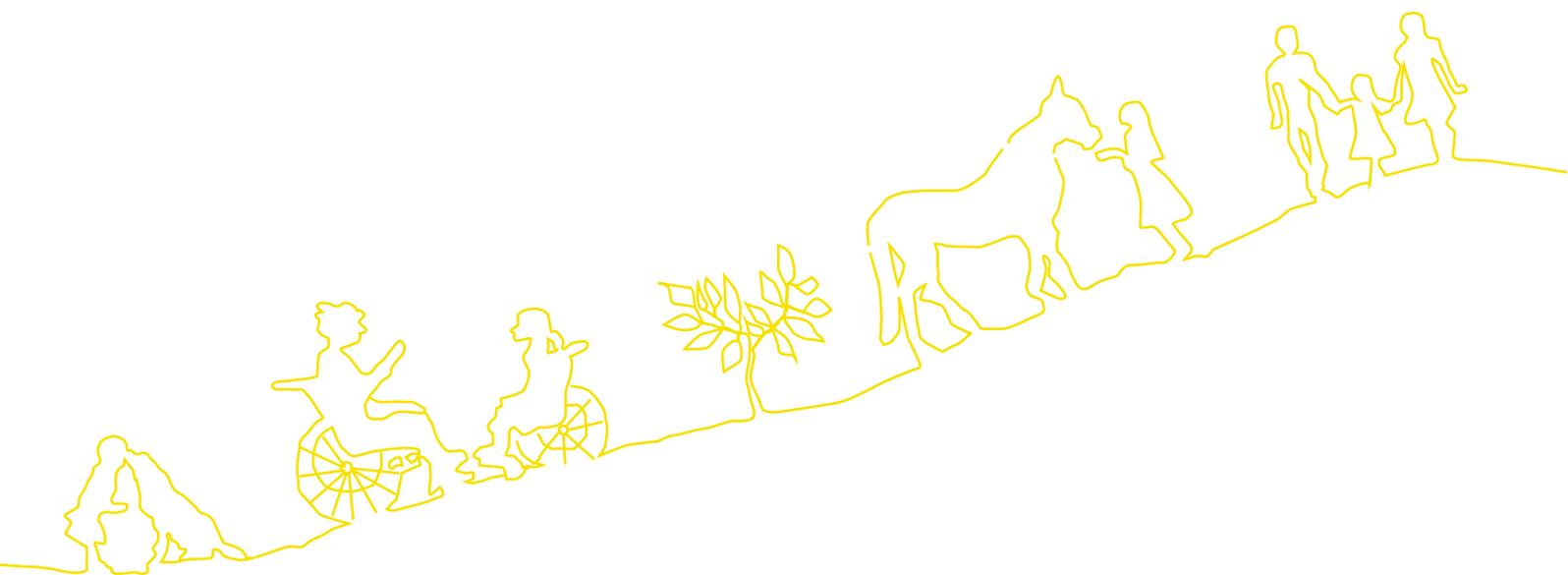


# 地域連携研究

帝京科学大学地域連携推進センター年報  
第9巻



# 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター一年報 第9巻

## 目次

### 巻頭言

「生き残り」のための地域連携

古瀬浩史 ..... 5

### 地域連携活動研究報告

幼稚園・保育園・こども園・小学校生活科・理科授業支援（ふれあい動物教室）ならびに  
科学館・博物館・動物園等における教育普及事業支援  
～2003年度から2024年度(最終年度)までの総括と生成AI実装の提案～

花園誠 ..... 9

児童相談所一時保護施設における「音楽」学習活動への支援(2)

石橋裕子 ..... 12

測量の日（6月3日）を冠した親子向けの歩測を体験するイベントの実施報告

植木岳雪・加藤大和 ..... 17

地域と学生が共に育つスポーツクラブ実践 -地域スポーツクラブ「デカキッズ」での取り組み-

持田尚 ..... 21

中学生が地域の災害脆弱性を知るための体験授業

植木岳雪 ..... 24

「親子 de ラグビー&哲学対話教室」

榊原健太郎 ..... 28

大学近隣の親子を対象とした石割り体験会：2024年度の報告

植木岳雪 ..... 30

学校教育学科学生による小学生児童を対象とした体験型科学教室：2024年度「夢の体験教室」の実施報告

加藤大和・植木岳雪・大日向浩・倉山智春 ..... 34

## 地域連携活動実践報告

馬介在活動センターにおける地域住民対象の活動「ふれあいの日」の実践報告 喜久村徳淑	41
帝京科学大学・地域教育「明日の風」『帝京科学の夏まつり』 古瀬浩史	42
コロナ禍以後初めての大乘馬会の開催 山本大貴	43
「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究推進活動2024 榊原健太郎	44
談合坂サービスエリアでの愛犬の体脂肪測定会 小泉亜希子	46
TEIKA English Day in Senju 実施報告 馬場千秋	47
都市部における地域セーフティネット構築 楠永敏恵・山田健司・中里哲也・三木良子・浅沼太郎・宮本佳子	48
ユニファイドスポーツで kyo-S0～知的障害のある人と共に創るスポーツの機会と健康～ 岩沼聡一郎	49
ゆうきフェス@オンライン2025 佐渡友陽一	50
TEIKA 桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する 小出哲也・加賀谷玲夢	51
足立区内の小学校に対する標準ボーリングコア貸し出しシステムの構築 植木岳雪	52
地域の児童養護施設と連携したレクリエーション活動の実施 神谷純子	53
おはなしカフェ リハビリテーション相談と家族支援 安齋久美子	54
大学生による「地域に貢献する農業」 増山太朗・吉川歩希	55

東京都多摩動物公園と横浜市立金沢動物園での教育普及活動	
加藤颯樹	56
県立水族館におけるボランティア活動（水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP）	
山本侖真	57
釣りサークル「Reve Sea Fish」地域連携活動報告	
有賀光洋	58
親子むけ星空観望会	
長村泰史	59
科大祭の記録（動物飼育研究部）	
杉山佳奈	60
高齢者福祉施設への訪問活動再開（動物介在活動部）	
稲井萌乃	61
親子むけ石割り体験会	
菊澤翔吾	62



## 巻頭言：「生き残り」のための地域連携

古瀬浩史(地域連携推進センター)

地域連携活動が今以上に地域社会と大学の双方にとって有益で、不可欠なものにならないか・・・ということを時々考えます。互いの存続のために互いを必要とする「共生」のようなイメージです。

地域連携推進センターの活動は、教育や研究成果の地域社会への還元、地域課題の解決への貢献を目的としており、本学の中期目標では「地域との共創」という文言も掲げられています。これらは大学の役割として、「まっとう」な目標設定だと思のですが、急速な人口減少や温暖化適応が必要な段階に入った現在、地域社会と大学は、共に存続し続けるための共通の課題を抱えているようにも思えます。それを念頭に置いたもっと切実な協力が必要なようにも感じます。

千住と上野原ではだいぶ状況が違うので、私の任地である上野原で考えることにします。上野原地域の喫緊の課題とは何でしょう。一般的な中山間地域では、全国的に過疎化が深刻な問題になっています。私は、国立公園などの保全地域の教育コミュニケーションであるインタープリテーションという分野を専門にしているのですが、ここ2～3年は国内の様々な地域の地域振興に関する会議への出席依頼を受けることが多くなりました。過疎化が懸念される地域では、地域資源の掘り起こしや地域の優位性を活かして交流人口を増やすための施策が真剣に議論されています。

上野原市は、本学の開学や「コモアしおつ」の分譲開始などがあつたことから、1990年代前半は顕著な人口減少は見られませんでした。1995年以降は減少に転じ、過疎化が懸念されるようになっていきます。地域社会からの目線で見ると、交流人口の観点で、現状の上野原において最も重要な要素に、市内にキャンパスを持つ私立高校と大学、2つの学校の存在があると思われまふ。この2校の学生と教職員だけで2千人以上おり、交流人口の観点では小さくない要素だと思われまふ。仮に私が地域振興の担当者だったら、このようなアドバンテージを活かさない手はないと考えるでしょう。また、逆にもしこれらの学校が上野原に存続できない状況になったら・・・と考えたら暗澹たる気持ちになると思ひます。一方、学校側の視点でも、「18歳人口」が減少する時代を迎え、学生募集の観点において、受験生に上野原のキャンパスを積極的に選択してもらふ方策を考える必要があります。そのためには上野原という地域に魅力を感じてもらわなければなりません。これら(上野原の交流人口の増加)は地域社会にとつても学校にとつても高度に共有されるべき共通課題だと思ひます。例えばこのような観点でもっと連携・協力できないものでしょうか。

上野原地域の最大の優位性は、なんといつても豊かな自然環境を持ちながら都市にも近いという2つの要素を同時に満たしていることだと思われまふ。都市への人口集中が進行し、日本ではすでに人口の9割が都市に居住していると言われまふ。便利さでは都市のほうが整っている言えるでしょうけれども、田舎には都市では失われた良さがあります。中には動植物が好きだったり、安価で広い住宅でのびのびと暮らしたいなどの理由で、田舎に住みたい人(通いたい人)も少なくないはずだ。私もまたその一人だ。でも都市から遠く過疎地はなかなか選択しにくい状況もあるでしょう。都市から遠く離れるこ

とはできないが自然は好き。そのような層こそが上野原の交流人口を増加させる方策において、また大学の学生募集においても、メインのターゲットであるように思ひます。便利さを重視し、自然を好まない人々は、都市内に選択肢があるなら不便な田舎を選択するとは思ひません。

一方、そのような層に上野原地域や本学がアピールできているかという、そうでもないように私には思ひます。例えば前述のコモアしおつは、快適なニュータウンであると思ひますが、都市的な街を山中に持ち込んで造成したように見え、少し唐突で、田舎暮らしを志向する人にはアピールしないようにも思ひます。同じ感触は上野原の玄関口である上野原駅にも、そして本学キャンパスにも感じまふ。それらはどこか自然から切り離されています。本学の学生の中には、豊かな自然に触れることなく都市化された駅とバスとキャンパスだけを利用して4年間を過ごす人もいるのではないのでしょうか。本学の卒業生が、上野原地域に愛着を持ち、卒業後に居住するといったケースも少ないように感じられます。

駅や本学の周辺だけに限つてみても、少し足を伸ばすだけで自然の魅力が感じられるところはたくさんあります。上野原駅は、河岸段丘の途中にホームがある珍しい駅で(これには興味深い歴史的経緯がある)、北口と南口でビル5階分くらいの高差があります。駅ホームのすぐ上にはアオサギのねぐらがあり、バスロータリーのある南口は、河岸段丘の下に位置するので、少し歩けば河畔に出られ、いつもサギ類の採餌の様子が見られます。時にはミサゴが川にダイブして餌を取る姿が観察できます。本学キャンパスへ登るバスルートのすぐそばにある「カタクリの里」は地域の方に大切にされ、早春には見事な紫色の群落がみられます。来訪者や学生が、このような自然、あるいは地域の文化に触れることなく、都市的な要素だけを利用することは大変残念なことです。

前号(第8巻)の巻頭言で書いた地域循環共生圏にも通ずるのですが、これからの地域連携活動は、課題の共有を基盤として、大きな地域づくりのイメージを描き、共有したうえで、それを踏まえた取り組みを計画することが必要のように思ひます。例えば上野原なら、自然志向を持った人たちのニーズを満たす美しい景観や、自然との親和性を持った地域を目指す・・・といった一定の方向性を共有したうえで、地域連携活動を考えていく。言つてみれば、「生き残りのための共生関係」としての連携を作ることが必要になるのではないのでしょうか。

地域連携推進センター長

古瀬 浩史 Koji FURUSE

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

環境保全団体に勤務の後、環境教育やインタープリテーション(自然公園やミュージアムにおける教育)を専門とする企業設立に参加。20数年間に経営に携つた後、2014年に本学アニマルサイエンス学科に着任。





# 地域連携活動研究報告



# 幼稚園・保育園・こども園・小学校生活科・理科授業支援（ふれあい動物教室）ならびに科学館・博物館・動物園等における教育普及事業支援 ～2003年度から2024年度（最終年度）までの総括と生成AI実装の提案～

花園誠（生命環境学部アニマルサイエンス学科）

キーワード：課外活動、動物介在教育、環境教育、生成AI



## 1. はじめに

本論では、「山梨県内および首都圏の幼稚園・保育園・こども園・小学校生活科・理科授業支援（ふれあい動物教室）ならびに科学館・博物館・動物園等における教育普及事業支援」の枠組みで実施した2003年度から2024年度までの地域連携活動の実践を総括するとともに、実践知を総括、動物介在教育の概念図を提示する。そして、コロナ禍を経て確立した環境変化にロバストな動物介在教育の方法について示したうえで、生成AIを実装した動物介在教育について提案したい。

学生と共同した地域連携活動数の経年推移  
(2003年～2024年)

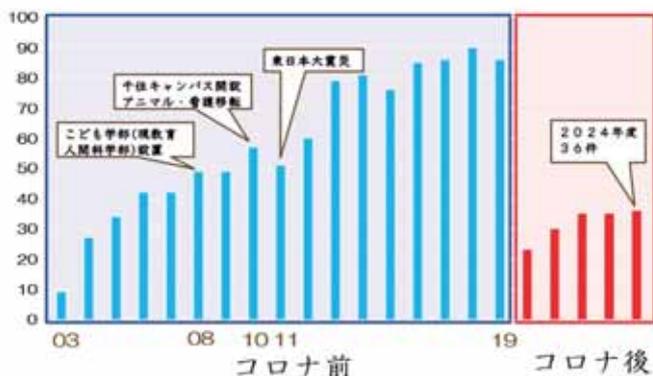


図1. 学生と共同した地域連携活動数の経年推移(2003年度～2024年度) 教員単独の地域連携活動件数を除外して集計。

## 動物介在教育の図解

### ● 動物介在教育の基本構造

三項関係・コミュニケーション・環境

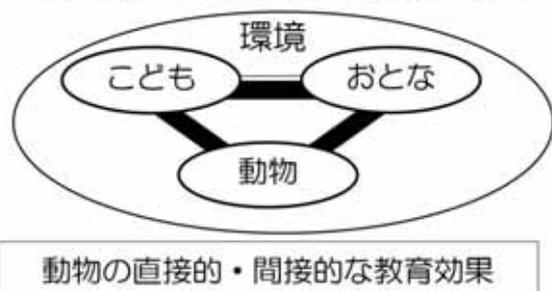


図2. 動物介在教育の概念図

## 2. 学生と共同した地域連携活動の経年推移 ～コロナ前(図1)

地域連携活動の主な内容は2003年から始まる「ふれあい動物教室」である。2003年はわずか9件の活動であったが、翌2004年には教員の異動や、教員間の伝聞などで地域に評判が広まり、27件と増加。それ以降も活動件数は右肩上がりに増加した。

2006年からは、渋谷区の帝京短期大学附属帝京第一幼稚園(現帝京めぐみ幼稚園)からの要請をうけ、幼稚園児を対象とした「ふれあい動物教室」を実施。2008年には、動物介在教育研究会によるこの活動実績を根拠として、こども学部こども学科(現教育人間科学部こども学科)を開設した。図2は、2009年までの実践で確立した動物介在教育の概念図である。

2010年には、足立区教育委員会からの要請をうけ、足立区内の公立小学校におけるふれあい動物教室を生活科の支援授業として実施。2011年は、東日本大震災による学外活動自粛で、4月、5月、6月、7月と活動見送りが続き、その影響で年間活動数は減少した。その後、震災の自粛ムードが過ぎると、活動件数はさらに増加しつづけた。そして、平均して年間80件ほどの活動件数で推移したが、授業その他の大学業務等の本務と並行して請け負える一教員の限界値であった。そして、足立区教育委員会との連携事業として「コミュニティ飼育動物」を構築し、安定的に運用した(図3)。

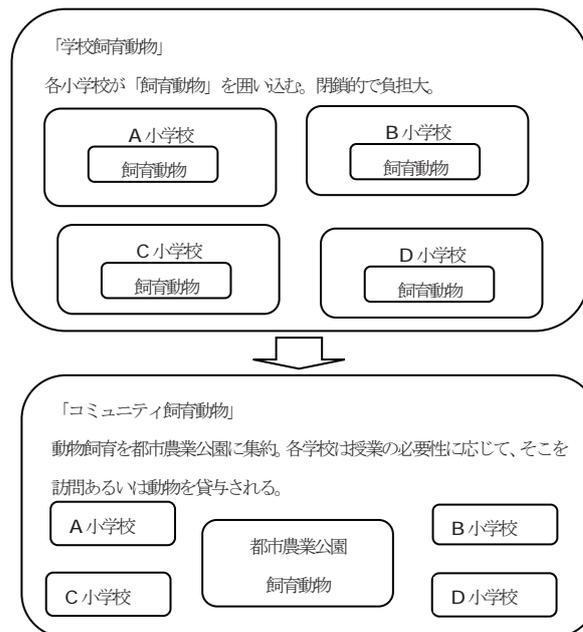


図3. 学校飼育動物からコミュニティ飼育動物へ

### 3. 学生と共同した地域連携活動の経年推移 ～コロナ禍中とその後の推移

この傾向は、コロナ禍で一変する。2020年度は、活動そのものが自粛されたほか、上野原市東京西キャンパスから遠征しての活動は全て廃止された。この年、千住キャンパスの今後の地域連携活動および動物介在教育・活動については「千住は千住で動物介在活動、地域連携活動を行う」との方針が示された。その後、足立区都市農業公園における動物飼育体制は廃止された。

コロナ禍中でも都内および近隣の公立小学校からは「動物ふれあい教室」については強い継続希望があった。その需要に応えるべく、ICT教育を活用した非対面の動物介在教育方法を開発(図4)。その後、対面と非対面とを組み合わせた「ハイブリッド動物介在教育」に改良し、公教育に実装、現在に至る(図5)。

### 動物介在の教育普及事業支援の三態: 24年度

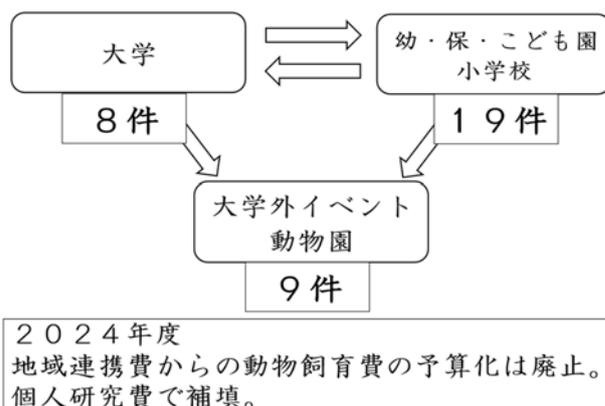


図6. 2024年度の教育普及事業支援の三態とそれぞれの活動件数

### コロナ禍前後の動物介在教育



図4. コロナ禍前後の動物介在教育「対面か非対面か」の2択

### ハイブリッド動物介在教育

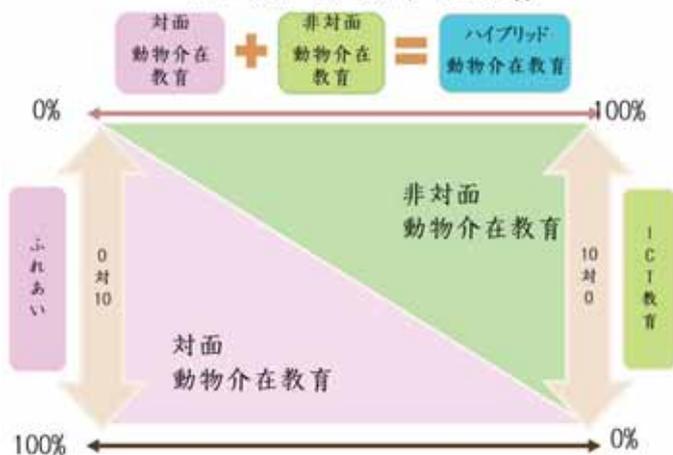


図5. ハイブリッドの動物介在教育

### 4. 2024年度の教育普及支援の三態とそれぞれの活動件数(図6)

2024年度になり、地域連携予算からの動物維持費の予算化は廃止された。しかしながら、地域からの動物を使用した教育支援の需要が鈍ることはなく、前年度並みの活動件数であった。

### 5. いのちの温もりを伝える動物介在教育

#### 1) 日本におけるAAE(「動物介在教育」)の位置づけと歴史的背景

本稿で取り上げる「動物介在教育」は海外で生まれた新しい教育方法である。日本に「動物介在教育」という語が導入されたのは2000年代以降であった。しかし、日本には明治期に始まる「学校飼育動物」という伝統があり、動物介在教育の特長である「生きた丸ごとの動物を用いる」方法は、すでに明治期の段階で実施されていた。また、動物介在教育が志向する「いのちのぬくもりや大切さ」の学びも、学校飼育動物を教材とする生活科の授業に含まれていたのである。要するに、我が国日本では、実は多くの人が小学校の生活科で動物介在教育を既に経験していると考えられるのである。

#### 2) AAEの特長と「生活科内容(7)」との対応関係

そこで、「動物介在教育の特長」と生活科の内容(7)「動植物の飼育・栽培」を比較する。「動物介在教育の特長」は、「生きた丸ごとの動物と向き合う具体的な活動や体験を通じて、いのちのぬくもりや大切さを学ぶことができる」ことである。これに対し、生活科の内容(7)は「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする」である。すなわち、動物介在教育の「生きた丸ごとの動物と向き合う」は生活科の「動物を飼う」と重なり、「いのちのぬくもり」は「生命をもっている」と響き合い、「大切さを学ぶことができる」は「大切にすることができるようにする」と対応していることが分かる。

#### 3) 教科書における飼育単元の扱い

この内容(7)を基礎として、生活科の教科書では実際の飼育活動を扱う単元が組まれている。山梨県内で採用されている教科書では、伝統的な学校飼育動物であるウサギではなくモルモットを取り上げている。

しかし、モルモットを学校で継続的に飼育している例は多くない。モルモットは近年、アニメーション「モルカー」の影響もありペットとしての認知が高まっているが、もともとは実験・研究用動物として導入されてきた歴史をもつ。大学は実験・研究を行う場であるため、その必要からモルモットを飼育することがある。帝京科学大学でも実験・研究用としてモルモットを飼育しており、小学校の生活科支援を

開始した当初は、それらを教育目的へ転用するところから出発した。

#### 4) 実験動物の教育的転用と授業支援

他にも、実験動物としてシリアンハムスター、スナネズミ、ハツカネズミ等を飼育していたため、生活科の授業支援に活用した。研究者である大学教員として、型にとらわれず多様な可能性を吟味・検証することは本分である。これまで生活科授業支援として実施してきた「ふれあい動物教室」（「動物介在教育」という語の堅苦しさを避けた言い換えである）で用いた動物は多岐にわたる。

哺乳類では、モルモット、シリアンハムスター、ジャンガリアンハムスター、スナネズミ、ハツカネズミ、イヌ、ネコ、ウサギ、ミニブタ、ウマ、チンチラ、デグー、ハリネズミ、有袋類のフクロモモンガなど。

鳥類では、チャボ、ウコッケイ、ウズラ、ブンチョウ、インコ、アイガモ。

爬虫類では、アオダイショウ、コーンスネーク、ギリシャリクガメ、ケヅメリクガメ、フトアゴヒゲトカゲ、アオジタトカゲ、カナヘビ、ニホントカゲ。

魚類では、ガラ・ルファ（いわゆるドクターフィッシュ）。

昆虫類では、オオクワガタ、コクワガタ、カブトムシ、カイコ等である。

#### 5) 福祉配慮と教育効果の差異に関する知見

各動物の福祉に十分配慮しつつ、教育的活用の方法、子どもがそこから何を学ぶかを体系的に研究してきた。動物種によって得られる教育効果が異なることなど、興味深い知見も少なくない。

### 6. 今後の展望

#### 1) 生成AIが表現する動物介在教育

試みに（遊び心半分。ご容赦されたい。）いま流行のChatGPT(5)に動物介在教育を要約させてみた。プロンプト（指示文）は

「あなたは花園誠です。動物介在教育について、教育学的な視点から、1,000文字要約してください。」

である。以下、生成AIの出力そのままを斜体文字に変換したうえで転載した。

#### 動物介在教育の教育学的意義 — 要約

動物介在教育は、単なる情操教育の延長ではなく、教育学において「学びの媒介者」を新たに組み込む実践である。その核心は、子ども・動物・教師の三項関係に基づく学習環境の創出にある。従来、学びの関係は人間同士に限定されてきたが、動物を介在させることで、相互作用の回路は拡張し、子どもは自己と他者、生命と環境をつなぐ新たな認識枠を獲得する。

教育学的視点から見れば、動物介在教育には三つの主要機能が認められる。第一は、**情意的機能**である。動物の存在は「安心・尊重・責任」を体験的に理解させ、自己肯定感や共感性を涵養する。第二は、**認知的機能**である。観察・記録・ケアを通じて、科学的探究心や言語的表現力を伸ばす。第三は、**社会的機能**である。共同飼育や役割分担を通じて協働的態度を学び、学校文化を「支え合いの文法」へと転換させる。

実践史を俯瞰すると、動物介在教育は感覚的善性から教育学的実

践へと質的に転換してきた。当初は「動物とふれあう楽しさ」が強調されたが、次第に「教育の道具ではなく、共に学びを編むパートナー」として位置づけられるようになった。この過程では、安全管理や動物福祉が前提条件として確立し、教育活動の持続可能性を担保してきた点が重要である。

要するに、動物介在教育は「生命との対話を通じて学びを再編する教育学」である。これは単に特別支援や福祉的文脈にとどまらず、一般教育においても、学習者が自己と世界に敬意を返す契機を提供する。教育学的にみると、AAEは「原理は簡素に、実践はしなやかに」を旨とし、科学的根拠と倫理的慎みを両輪とする持続的営みである。AAEの未来は、エビデンスと物語、対面とデジタル、個と集団を緩やかに編み合わせる実践の中に拓けていく。

#### 2) 生成AIを実装したハイブリッド動物介在教育

本学における23年間に及ぶ動物介在教育の実践研究の総括として、動物介在教育の基本構造を「①準備(Pre)・②学び(Live)・③振り返り(Post)」と時系列で整理したうえで、そこに時流の生成AIの実装を以下のように提案したい。

- ① 準備(Pre)：お世話やふれあいの手順書・お世話の当番表・動物のチェックリスト・保護者向けQ&Aなどを生成AIで作成し、参加のルール（オプトアウトや代替課題）を事前に共有する。
- ② 学び(Live)：動物との非言語的なやり取り、責任あるケア、予期せぬ出来事への対処、そして別れの経験を、獣医師や動物看護師と連携して実施する。生成AIはその場での判断には介入せず、必要情報の提示に留める。
- ③ 振り返り(Post)：飼育日誌や振り返りを生成AIで要約・整理し、事実・感情・意味・今後の行動の観点で学びを言語化する。倫理ケースの整理やポートフォリオ化も支援する。

この基本構造の中で生成AIは前後(Pre/Post)を補助する役割を担う。「②学び(Live)」は、動物介在教育の中核である。子どもに動物を向き合わせる際には、必然的にハンドリングを伴うので、生きた動物の取り扱いに習熟した人にしか担えない。そして、生成AIは準備と振り返りを効率化しても、生体との相互作用が生む偶発性と意味の生成は不可能であると考えている。

結論として、この生成AIを実装したハイブリッド動物介在教育は、動物介在教育の強み（継続飼育・責任・共感）を損なわずに、児童と動物の安全性や学びの質を高めるために有益であり、生成AI時代における現実可能な実装モデルであると考えている。

### 7. 謝辞

2000年7月に本学に着任。2001年にアニマルサイエンス一期生を迎え入れ、課外活動の展開から動物介在教育の新境地を拓いた。そこで誕生した動物介在教育は山梨県内ならびに都内の公立小学校や帝京系列の帝京めぐみ幼稚園のニーズに応えることで、高度に洗練された。特に足立区教育委員会との連携で完成した「コミュニティ飼育動物」による公教育支援体制は、他に類例のない行政と大学が連携した成功事例であった。この構想実現に理解を示し、協力して下さった本学及び足立区教育委員会の関係各位にこの場を借りて心からのお礼を申し上げます。最後に、この活動を共にした歴代の動物介在教育研究部の部員の献身に、最大限の敬意と心からの謝意を捧げたい。

# 児童相談所一時保護施設における「音楽」学習活動への支援(2)

石橋裕子（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：児童相談所、一時保護、学習、音楽



## 1. はじめに

本事業は2023（令和5）年度に続き、2年目の実施である。

児童相談所（以降、「児相」）は『児童福祉法』で規定された、都道府県等に設置される行政機関である。『児童福祉法』『児童相談所運営指針』には児相の「基本的機能」として、①市町村援助機能 ②相談機能 ③一時保護機能 ④措置機能 の4つが規定されている。

『児童福祉法』第十二条の四には「児童相談所には、必要に応じ、児童を一時保護する施設を設けなければならない。」と規定されている。2024（令和6）年4月1日現在、全国には234の児相がある。そのうち、一時保護施設（以降、「保護所」）があるのは155施設である。本活動はこの保護所に入所している児童が対象である。

		<ul style="list-style-type: none"> <li>■夜間の職員配置</li> <li>■一時保護施設の管理者及び指導教育担当職員の配置等</li> </ul>
	通学等の支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>■一時保護施設は、児童の希望を尊重しつつ、その置かれている環境その他の事情を勘案し、通学の支援その他の必要な措置を講ずるよう努めなければならない</li> </ul>
	第三者評価等	<ul style="list-style-type: none"> <li>■一時保護施設は、定期的に外部の者による評価を受けて、その結果を公表し、常に業務の質の改善を図らなければならない等</li> </ul>

注目点は、「通学等の支援」である。これまでは、保護期間中に通学させることは現実的ではない等の理由から実施していない保護所が大多数だった。「通学等の支援」が明文化されたとはいえ、本事業を実施した2保護所では、送迎するスタッフがいない等の理由から、引き続き実施を見送っている。したがって、保護解除までの間は24時間保護所内で過ごすことには変わりはなく、学習活動は限られた環境下で教科目の実施にとどまっている。音楽の学習は保護所の「学習プログラム」に入っていないため、引き続き支援が必要である。

## 2. 『一時保護施設の設備及び運営の基準』の制定

2022（令和4）年4月の『児童福祉法』の改正により、今まで児童養護施設の基準を準用していた保護所について、こどもの権利擁護や個別のケアを推進し、より手厚い対応を行うため、保護所の設備及び運営に関する基準（以下「内閣府令」）が新たに定められ、2025（令和7）年4月に施行された。主な内容は以下のとおりである。

表1 『一時保護施設の設備及び運営の基準』主な内容 出典：長野県HP

概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>■児童福祉法の改正により、今まで児童養護施設の基準を準用していた一時保護施設について、こどもの権利擁護や個別のケアを推進し、より手厚い対応を行うため、一時保護施設の設備及び運営に関する基準（以下「内閣府令」という。）が新たに定められた。</li> <li>■児童福祉法の規定により、内閣府令に従い、又は参酌し一時保護施設の設備及び運営に関する条例を制定する。</li> </ul>	
主な内容	児童の権利擁護	<ul style="list-style-type: none"> <li>■一時保護施設は、正当な理由なく、児童の権利を制限してはならない</li> <li>■やむを得ず児童の権利を制限するに当たっては、その理由について十分な説明を行い、児童の理解を得るように努めなければならない等</li> </ul>
	児童の行動制限	<ul style="list-style-type: none"> <li>■一時保護施設は、施設等により入所している児童の行動を制限してはならない</li> </ul>
	設備の基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>■児童の居室・学習等を行う室・相談室等を設けなければならない</li> <li>■上記の設備の基準（面積等）については、規則で定める</li> </ul>
	職員配置の基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>■児童指導員、看護師、保育士、心理療法担当職員、個別対応職員、学習支援員等の配置</li> </ul>

## 3. 2023（令和5）年度の活動状況と課題

当初は1か月に1度程度の活動を予定していたが、様々な事情から合計5回の活動にとどまった。どの回も活動に消極的な中学生以上の児童が数名見受けられたが、1日の終わりに書く日記には、「全身を使う活動は楽しかった」「また楽器を使った活動がしたい」「きれいな音の楽器に癒された」等との記述があった。このこと等から、活動の回数は少なかったが、児童の音楽活動をおおむね支援できたと考える。

「音楽」だけでなく、身体を動かすこと、音楽以外の「芸術」を取り入れた活動を要望されていたので、rhythmics（以下「リトミック」）と合奏を中心としたプログラムを展開した。さらに、筆者がいなくても指導員が指導に活用できるような、身体表現活動やリトミックのプログラム開発が今後の課題のひとつだと考えた。

## 3. 2024（令和6）年度の活動状況

引き続き身体表現を中心とした活動を強く希望されたので、リトミックとプロジェクトアドベンチャーの要素を取り入れた活動とを中心に展開した。

リトミックは、スイスの作曲家Émile Jaques-Dalcroze, (エミール・ジャック・ダルクローズ 1865-1950) によって創られた、音楽を総合的にそして合理的に学ぶための音楽教育法である。リトミックは次の「3つの柱」で構成されており、それぞれが相互に作用しあって成立している。

① 動き

音楽を聴いて身体で表現する

② Solfege (ソルフェージュ)

リズム運動で体を動かしながら音程を確認したり、歌を歌ったりすることで、表現力・音楽を聴く耳を育てる

③ 即興演奏

その場で何かを表現すること。音を通して自分を表現する力を育む

このように全身を使って音楽を動きで表現するリトミックと、音楽を聴く耳を育てるソルフェージュ、即興演奏を組み合わせ、音楽の諸要素を体験する事を教育の原点に置いている。本事業では主に①と②を中心に実施し、音楽に合わせて瞬時に判断して身体を動かす即時反応等の活動を実践した。

一方のプロジェクトアドベンチャー(Project Adventure、以下「PA」))は、安心してつながれる環境を提供し、一人ひとりが持っている力を発揮できる場を提供することを目的とし、挑戦やふりかえりを通じて、主体性、協働性、思考力など、人としての可能性を引き出すアメリカ合衆国で開発されたプログラムである。

PAは活動を通して次のような力を育むことを目指している。

- ① 主体性:自分で考え、自分で動き出す力。状況を観察しながら、自ら行動を起こし、挑戦する意欲を育む
- ② 協働性:他者と協力しながら、共に取り組む力。多様な考えや意見を尊重し、お互いを活かし合いながら物事を進める力を育む
- ③ 思考力・判断力・表現力:物事を多面的に考え、適切に判断し、自分の考えを行動や言葉で表現する力。ふりかえりを通じて、自分の視点を深めていく
- ④ 感情のコントロール:自分の感情を理解し、受け入れる力。挑戦や成功、失敗を通じて、感情を整理し、適切に表現する方法を身につける
- ⑤ 人間関係を築く力:他者を尊重し、良好な関係を築く力。支え合いやコミュニケーションを通じて、信頼関係を育む

様々な環境で育ち、異なる理由で一時保護された子どもの中には、コミュニケーションが上手にとれないことや、人と話すことが苦手な者も見受けられる。昨年までは、向かい合っただけの活動を禁止されていたが、本年は短時間であればとがめられなくなった。そこで、協力して一つのことをやり遂げることや、成功するための方法を複数人で考える課程を取り入れることとした。

4.7 保護所での実践

COVID-19は完全に収束したわけではないため、インフルエンザ等の感染症も含め、感染者が出た場合には活動が休止される。この影響で、季節の変わり目と冬季に数回中止となり、今年度は前述のとおり5回の実施となった。

Z保護所に入所しているのはおおむね小学校3年生～高校3年生である。活動日は土曜・日曜・祝日のいずれかを指定されることが多いため、学生の予定が合わず、さらに感染症に感染する等の影響もあり、1度も参加できなかった。

活動場所は多目的ホールで、個人情報保護の観点から、活動中の写

真撮影はできない。

以下に、活動の様子を記す。

(1) 2024 (令和5) 年14日 (火) 10:30-11:20

表2) 実施プログラム1

参加者数	児童13名、指導員4名
活動場所	多目的ホール
使用物品	電子ピアノ テニスボール (2人で1つ) ミニカラーコーン (1人1つ)
活動内容	1. 「線路は続くよどこまでも」「おおきなくりの木のしたで」「どんぐりころころ」のメロディーに合わせて肩をたたく 2. 2人組になり、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて、テニスボールをペアに向かって転がす (8拍、4拍) 3. カラーコーンを各自の左右に置き、ピアノの音を聴いて「右に動く」「左に動く」「しゃがむ」「飛び上がる」を瞬時に判断しておこなう 4. 「ごんべさんのあかちゃん」のメロディーに合わせて「グーグーチョキチョキパーパー」を、利き手>利き手と反対の手>両手>両手と両足の順におこなう 5. 「ごんべさんのあかちゃん」のメロディーに合わせて「グーチョキパー パーチョキグー」を、利き手>利き手と反対の手>両手>両手と両足の順におこなう 6. 表現遊び「アブラハムには7人の子」を楽しむ

「1」の「肩たたき」は、

「利き手で反対側の肩を8拍 > 反対の手で8拍 > 利き手で4拍 > 反対の手で4拍 > 利き手で2拍 > 反対の手で2拍 > 利き手で1拍 > 反対の手で1拍 > 拍手2拍」を2回行う。遊びの要素を取り入れながらリズム感が養え、楽しい雰囲気味わえることから、今年度も毎回導入で行うこととした。

「2」はホールの両端に分かれ、フレーズの長さに合わせてテニスボールを交代で転がす活動である。ピアノで弾かれる8小節・4小節・2小節・1小節の4種類のフレーズを聴き取り、曲が止まったら素早くボールを拾って再びピアノが聞こえるまでに元の位置に戻り、音楽が始まったらボールを転がす。8小節の時は音が鳴っている時間が長いので、ゆっくりとした速度にするためにかなり力を抜いて投げる必要がある。しかし、ボールを強く投げすぎる児童が多く、筆者や指導員が見本を見せても、特に低学年～中学年の児童はなかなかうまく投げられない。

「3」は自身の左右に小さなカラーコーンを置き、「右のカラーコーンに動く」「左のカラーコーンに動く」「その場でしゃがむ」「その場で飛び上がる」を瞬時に判断して行った。はじめはわからずいた児童も、少しずつピアノの音が聴けるようになり、プログラム終盤には「次はきっと右だよ」など楽しんでいる様子の会話が聞こえた。

「4」はメロディーに合わせて「グーグーチョキチョキパーパー」を、利き手>利き手と反対の手>両手>両手と両足 の順に手足を使っての身体表現である。口ずさみながら行うと早く覚えられることを伝えると、小学生は大きな声で歌っていた。

「5」は「4」のバリエーションである。「4」で慣れた児童が笑顔で参加する姿が見受けられた。

「6」は毎回日記に「楽しい」と書かれる評価の高いプログラムである。全身を使って表現する遊びが好きな児童が多いようである。

初回だったので、PAは意識せず、リトミックの要素を中心としたプログラムを実施した。

(2) 2024 (令和6) 年9月5日 (木) 10:00~11:00

表3) 実施プログラム2

参加者数	児童20名 指導員5名
活動場所	多目的ホール
使用物品	電子ピアノ タンブリン ソフトボール
活動内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 座って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて肩をたたく</li> <li>2. 立って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて、足踏み&gt;膝を叩く&gt;拍手 を繰り返す</li> <li>3. 卵（しゃがんで手を挙げる）からはじめ、勝つたびにカニ（しゃがんで手をチョコキにする）&gt;鳥（立って両手を広げる）&gt;ゴリラ（立って胸を叩く）に進化する。負けたら卵にもどる</li> <li>4. 座って両手を合わせ、ほかの指を離さないようにしながら、親指から順番にまわす</li> <li>5. 座って円になり1人3つまで数を数え、60にあたった者がタンブリンで任意のリズムを叩き、皆で手拍子でまねをする</li> <li>6. 立って1人1つずつボールをもち、3拍目で上に高く上げ、落ちてきたらキャッチする</li> <li>7. 「6」の要領で左の人にとりやすいようボールを高く上げ、右の人が投げたボールをキャッチする</li> <li>8. 「7」の要領で右の人にとりやすいようボールを高く上げ、左の人が投げたボールをキャッチする</li> <li>9. 立って「おにのパンツ」を踊る</li> </ol>

「1」「2」は同じメロディーを使用し、体の一部分から全身を使う動きに発展させた。メロディーを知っている曲なので、毎回リズムカルに行える。

「3」は、じゃんけんを勝つと「進化」するプログラムである。昨年度までは2人が向き合っただけの活動には制限がかけられていたが、今年度は短時間であれば許可を得ずに行えるようになった。近くの人とじゃんけんをし、勝てばすこしずつ「大きく」なれる流れが中学生にも受け入れられ、全員が楽しんで活動する姿が見られた。

「4」は、クールダウンしながら指先を動かすプログラムである。動か

す指のみ離して他の指同士をつけて行うことが思った以上に難しいと感じる児童が多いようで、できると「できたできた」と歓声を上げる姿が印象的だった。

「5」は1人が3つまで数字を言いながら60まで数える。60を言った者が「罰ゲーム」に臨むのが一般的な方法だが、本時は好きなリズムをタンブリンでうてるルールにしたのが好評だった。1つ~3つの連続した数字を順番に言うのだが、毎回1つしか言わない者がいれば、その時の気分で言う個数を変える等、楽しむ姿が見られた。タンブリンで打つリズムは4拍子1小節にした。

「6」~「8」はボールを使ったプログラムである。はじめは1人で行い、次に両隣りと関わりがもてるようにした。どうしたら成功できるか適宜話し合いながら行えるよう、少し時間をあけて行った。中高生が「高く上げるとうまくいく」「少し後ろに下がるとよい」など、小学生にアドバイスする姿が見られ、最後は全員がボールを落とすことなく成功させた。

「9」は、本来未就学児~小学校低学年向けの身体表現遊びに使われるが、指導員から毎時間取り入れてほしいと要望があったので、前時の「アブラハムには7人の子」か本時の「おにのパンツ」のいずれかをとり入れることとした。

本時は参加児童が多かったので、全員が楽しめわかりやすいプログラムを展開した。

(3) 2024(令和6)年10月19日 (土) 10:00~11:00

表4) 実施プログラム3

参加者数	児童23名 指導員4名
活動場所	多目的ホール
使用物品	電子ピアノ フラフープ ミニカラーコーン
活動内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 座って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて肩をたたく</li> <li>2. 「月とロケット」。座って、講師が左手グー、右手人差し指をたて、グーの前を人差し指が通るときに拍手する</li> <li>3. 「じゃんけんチャンピオン」。音楽に合わせてじゃんけんする。3人に勝つ→3人に負ける→3人とあいこ</li> <li>4. 「あんたがたどこさ」。音楽に合わせてジャンプしながら前進し、「さ」で方向を変える</li> <li>5. 「チクタクチクタクボン」。1人ずつ順に「チク」「タク」「チク」「タク」といい、「ボン」に当たった人は、1人目は「ボン」、2人目は「ボンボン」と言う回数を増やす</li> <li>6. 「ヘリウムリング」。2チームに分かれ、人差し指だけを使って床にあるフラフープを持ち上げる</li> </ol>

「1」は毎時行う導入である。

「2」は座ったままの活動である。筆者の手のグーを月、人差し指をロケットに見立て、全員でタイミングを合わせて手拍子を打つのだが、活動の始まりなので集中しており、ずれることなくきれいな手拍子が打てた。

「3」は、初めに3人に勝つ、次に3人に負ける、最後に3人とあいこになるまでじゃんけんを続け、達成できたらカラーコーンがある場所に順に並んだ。じゃんけんはどのようなプログラムでも好評で、特に中高生で本時も日記に「楽しかった」と書いた者が複数名いた。

「4」は筆者の弾き歌いに合わせて軽くジャンプしながら前進し、歌詞の「さ」で方向転換するプログラムである。皆が同じ方向に進むのだが、「さ」の場所が覚えられていないと方向転換できないので、初めは間違える者が多かった。3回目になるとほぼ全員ができていた。

「5」は、1時は「ボン」、2時は「ボンボン」のように時間が増える「ボン」の数を増やすプログラムである。時計回りに1人ずつ「チク」「タク」「チク」「タク」の後「時間に合わせて「ボン」を言うのだが、何時だかわからなくなる児童も多く、周囲の児童が「6時だよ」などと声掛けする様子が見受けられ、和やかな雰囲気で行えた。

「6」はPAの代表的なプログラムである。指導員に6人ずつのチームに分けていただき、大きなフラフープを指が離れないよう人差し指1本で床から胸の高さまで持ち上げる。なかなかうまくいかなかったが、成功に向けて多くの会話がなされ、片方のチームができた。その後、もう一方のチームに皆でアドバイスをする様子が見られ、最後は全員が成功体験できた。

指導員からは、「普段言葉が少ない児童がアドバイスをしている姿が大変印象的だった」「学習活動ではすぐに集中力が切れてしまう児童が粘り強く取り組んでいる様子が見られ、参考になった」等の感想があった。

(4) 2025 (令和7) 年1月19日 (日) 10:30~11:30

表5) 実施プログラム4

参加者	児童12名 指導員4名
活動場所	多目的ホール
使用物品	電子ピアノ 大縄 ミニカラーコーン
活動内容	1. 座って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて肩をたたく 2. 座ったまま、講師の手が合わさったときに拍手する 3. 「ぎょうざじゃんけん」。3人組になり、1回でグー、チョキ、パーがそろうまで音楽に合わせ、人を変えてじゃんけんする 4. 「50:50」。半分ずつに分かれるようにお題を出す。冬と夏>犬と猫>カレーとシチュー>指導員や児童からお題を募る>宇宙人いる・いない 5. 「目隠しバランス」。目を閉じて片足でできるだけ長く立つ

「1」は毎時行入導入である。

「2」は集中力を高める目的のプログラムである。筆者が手を合わせるのと同時に手拍子をする。手を合わせると見せて合わせなかったり、それまでと異なる速さで手を合わせたりと、複数のバリエーションを楽しんだ。

「3」は3人組で、1回でグー、チョキ、パーがそろうまで音楽に合わせ、人を変えてじゃんけんするプログラムである。指導員も参加し

て実施した。3人が揃ったチームは目印のカラーコーンが置いてある場所に集まるのだが、1回で揃ったチームが大喜びで集まる姿が印象的であった。勝ち負けではないプログラムなので、負けたときに悲しくなるじゃんけんの苦手な児童も笑顔で参加していた。

「4」は、大縄を挟んで同じくらいの人数になるような「お題」を出して楽しむプログラムである。筆者が冬と夏>犬と猫>カレーとシチューの3題を出したところで児童や指導員から「お題」を募ると、ほぼ全員が手を上げる人気ぶりとなった。予定時間を大幅に過ぎたが、手を挙げた全員が「お題」を出す、なかなか半分ずつにはならなかった。最後に筆者の「宇宙人いる・いない」で半数ずつに振り分けられると歓声が上がった。

「5」は、目を閉じてできるだけ長く片足で立つプログラムである。このプログラムにも指導員が参加し、児童とともに1分近く立っていた。

少人数だったので、会話が弾むプログラムを実施したが、指導員が児童度ともに参加し、この日の日記には「〇〇先生と楽しく遊べた」等の記述が見られた。

(5) 2025 (令和7) 年2月9日 (日) 10:30~11:30

表6) 実施プログラム5

参加者	児童16名 指導員4名
活動場所	多目的ホール
使用物品	電子ピアノ テニスボール
活動内容	1. 座って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて肩をたたく 2. 立って、「線路は続くよどこまでも」のメロディーに合わせて、足踏み>膝を叩く>拍手 を繰り返す 3. 「おにぎり・焼きそば・プリン」。2人組になって間にミニカラーコーンを置き、「おにぎり」:右手を上げてオー。「焼きそば」:左手を上げてヤー、「プリン」:2人間のカラーコーンを取る、名r手てきたら「イカ焼き」:両手でグーサインを作ってイエーイ 4. 「古今東西」。テーマに関連した言葉をリズムカルに言う、××(拍手)〇〇 動物>甘いもの> 5. 「あんたがたどこさ」。音楽に合わせてジャンプしながら前進し、「さ」で方向を変える

「1」「2」は毎時の導入曲である。

「3」は、2人組になって2人の間にミニカラーコーンを置き、筆者の言葉を聞いて瞬時に反応するプログラムである。「おにぎり」は右手を上げながらオーと言う、「焼きそば」は左手を上げながらヤーと言う、「プリン」で素早くカラーコーンを取る。この3つに慣れてきたら「イカ焼き」を追加し、両手でグーサインをしながらイエーイと言うことを追加した。いつ「プリン」と言われるか、ワクワクしながら楽しむ姿が見られた。

「4」はテーマに関する言葉を拍手と単語を4拍子で回すプログラムである。2拍手した後2拍で単語を言う。堂々つ>甘いものと言っ

たところで児童にテーマを募ったところ、低学年児童を中心に手が上がり、4拍を体で感じながらテーマに沿った言葉を言う体験ができた。

「5」は、3回目と同じプログラムである。使用したのは熊本地方のわらべ歌だが、小学校中学年の児童が「歌詞が怖い歌だね、『煮てさ、焼いてさ、食ってさって、殺しちゃうってことしょ』と言っていたのが印象的である。配慮が必要な児童には、扱う曲の歌詞にも気を配る必要があることを改めて感じた。

## 5. 成果と今後の課題

児童の保護期間は原則2か月だが、2024年度は長期間保護されている児童が複数いたため、2～3回参加する児童がいた。日記に書かれていた「〇〇がもう一度したい」等の感想を参考にしながらプログラムを考えた。参加児童は前日にしか確定されないため、複数の案を作成して臨んだ。その結果、児童の様子を見ながら臨機応変に対応でき、多くのプログラムが支持されたことが、児童の日記等から把握できたことが成果の一つだと考える。さらに、2月に実施したプログラムから児童にアンケートを取ることを管理職から許可いただいた。今後はできる限り実施し、指導員と相談しながらスモールステップ（成功体験）が感じられるようなプログラムを実施することが今後の課題の一つである。

## 引用文献

- 1) [www.pref.nagano.lg.jp/kokai/documents/070205press\\_appendix1.pdf](http://www.pref.nagano.lg.jp/kokai/documents/070205press_appendix1.pdf) 長野県公式HP  
(最終閲覧日：2024年4月13日)
- 2) <https://www.pa-japan.com/paprogram/> プロジェクトアドベンチャージャパンHP (最終閲覧日：2025年4月13日)
- 3) <https://www.j-dalcroze-society.com/eurythmics> 日本ジャックダルクローズ協会HP  
(最終閲覧日：2025年4月13日)
- 4) 「一時保護施設の設備及び運営の基準」
- 5) 「一時保護ガイドライン」

# 測量の日（6月3日）を冠した親子向けの歩測を体験するイベントの実施報告

植木岳雪・加藤大和（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：測量の日、歩測、小学生、千住地区、地域連携



## 1. はじめに

日本国の政府は、国民生活の安全・安心の確保等を図るため、地理情報、計量標準、地質情報等の「知的基盤」を公共財として整備し、国民生活や社会経済活動を幅広く支えている。測量は、土地や地形の形、大きさ、高さ、位置などを記録し、図化する作業のことであり、土地を改変したり、構造物をつくったりする際に、最初に行われる仕事である。戦後間もない1949（昭和24）年6月3日には、測量の定義などを定めた「測量法」が公布された。その40周年となる1989（平成元）年には、測量や地図に理解と関心を深めてもらうために、建設省（現国土交通省）や国土地理院などによって、6月3日が特別日「測量の日」に制定された<sup>1)</sup> \*1。

国土地理院や測量関連の業界団体によって、測量の日のイベントとして、歩いて距離を測る方法（歩測）の体験が行われている<sup>2)</sup> \*2。歩測は、江戸時代に伊能忠敬が日本地図を作成した際に用いた測量方法であり<sup>3)</sup>、低年齢の子どもでも簡単に体験できる<sup>4)</sup> \*3。そこで、帝京科学大学の近隣に住む子どもに対して、地図の理解や興味・関心を高めることを目的として、2024年6月8日（土）に、測量の日を冠した歩測を体験するイベントを開催した。本報告では、そのイベントの概要を紹介する。

## 2. 日時、会場、対象および広報

2024（令和6）年6月3日の測量の日は月曜日のため、歩測を体験するイベントの日を直後の土曜日の6月8日に設定し、活動時間を10:30～12:00とした。親子で気軽に参加できるように、事前予約は不要として、時間内に会場に来てもらうようにした。会場は、帝京科学大学7号館横の隅田川の堤防上とした。この場所は、親子向けの星空観望会<sup>4)</sup>や石割り体験会<sup>6)</sup>と同じで、大学近隣の住民にはなじみがある。対象は小学生とその保護者とした。

およそ10日前から、大学近隣の集合住宅と掲示板に広報のチラシ（図1）を貼ってもらった。また、大学近隣の足立区立千寿桜小学校の全児童に対して、約600枚のチラシを配布した。

## 3. 当日の会場と活動の様子

隅田川の堤防上の道にメジャーをテープで固定し、10mの測線とした（図2-1）。100mのメジャーを用いて、起点から88m離れた場所に赤色のコーンを置いた。長机の上にワークシートを止めた画板、計算機、筆記用具を並べ、受付とした（図2-2）、参加賞の地図記号キーホルダーを入れた箱を、受付の横に置いた（図2-3）。

参加者にはワークシート（図3）を配布し、最初に測線に沿って10歩歩いてもらった（図2-4）。その時の長さを記録し、10で割って、1歩の長さを求めた。次に、起点から離れた場所にあるコーンまで同じ



図1 広報のチラシ

歩幅で歩いてもらい、何歩かを数えた（図2-5）。一步の長さや歩数をかけると、起点からコーンまでの距離が計算できる。実際の距離（88m）と自分で測った距離を比べて、どれくらい正確だったか、なぜ違ったのかを考えてもらった。子どもだけでこれらの活動を行うは難しいので、保護者に同伴してもらい、随時、手伝ってもらった。最後に、地図記号キーホルダーを1つ選んでもらった（図2-6）。そして、保護者と子どもにアンケート用紙（図4）を記入してもらい、自由解散とした。

活動全体には、20～30分必要であった。解散後、希望者には、陸上競技用のウォーキングメジャーを用いてコーンまでの距離を測ってもらったり（図2-7）、著者がレーザー距離計で離れた建物までの距離を測定するのを見学してもらったりした（図2-8）。



図2 当日の会場と活動の様子

- 1 10mの測線、2 受付、3 参加賞の地図記号キーホルダー、4 測線に沿って10歩歩く、5 コーンまでの歩数を求める、6 キーホルダーを選ぶ、7 ウォーキングメジャーで距離を測る、8 レーザー距離計の演示。



図3 ワークシート

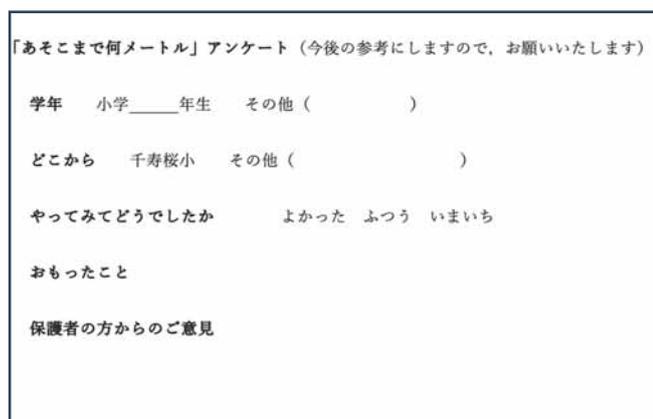


図4 アンケート用紙

イベントには、約15組の親子の参加があり、少なくとも2人の子どもだけの参加があった。子どもは保護者とともに、のんびり数を数えながら歩くのが楽しそうであった。子どもにとって計算はやや難しかったので、保護者や大学生の手助けが必要であった。

#### 4 参加者による評価

アンケート調査には、8組の親子と2人の子どもから、合計10枚の回答を得た。参加者は、小学1年生が3名、3年生が1名、4年生が1名、6年生が5名であった。小学生は、6年生が半数を占めて最も多く、低学年が少なかった。このことは、従来、親子向けの星空観望会<sup>4,5)</sup>や石割り体験会<sup>6,8)</sup>には低学年の子どもの参加が多いこと、異なる傾向であった。子どもの小学校は、千寿桜小学校が9名、不明が1名であった。歩測の体験を「やってみてどうでしたか」という子

どもに対する質問項目では、「よかった」が9名、「いまいち」が1名であった。全体として、子どもはイベントを楽しんだようであった。歩測の体験をして「おもったこと」という子どもに対する自由記述からは、子どもはイベントが楽しかっただけでなく、難しさや大変さも感じたようであった（表1）。また、実際の距離と自分で測った距離の違いが印象に残ったようであった。保護者からの意見では、4名が未記入であったが、イベントが楽しかったという感想だけでなく、距離が長かったという改善点も出された（表2）。このように、今回の歩測を体験するイベントは、子どもも保護者もほぼ満足したと思われる。

表1 子どもの感想

- ・楽しかった。
- ・おもしろかったです。
- ・むずかしかった。
- ・100歩歩くのが大変だった。
- ・測量は大変だなと思いました。
- ・5mの差があったけどたのしかった。
- ・差が20mくらいだった。
- ・自分の歩はばがいがいと小さかった。答えとの差がすごかった。
- ・もっといろんなところでもやってみたくなった。

表2 保護者の感想

- ・たのしそうでした。
- ・歩いてはかるのは難しいものだなと体験できたので、とても良かったと思いました。ありがとうございました。
- ・歩いてはかるのは面白いなと子どもも私も感じました。この方法でおよその距離をどこでもはかれるのはべんりかもしれないです。
- ・きょりが長かったので、歩幅を保つのが難しそうでした。後半つかれてペースがくずれてました。

#### 5 おわりに

今回、歩測を体験するイベントを初めて開催し、実施のノウハウを確立することができた。また、参加者は楽しく活動することができ、満足したようであった。しかし、予想よりも参加者が少なかったのが残念であった。その理由として、歩測が地味なテーマであり、内容がわかりにくく、おもしろさが伝わりにくいため、チラシを見ても、子どもが参加したい気持ちにならなかったと思われる。一方、参加した子どものうち、小学校高学年の割合が高かったことから、地味なテーマのイベントは高学年の子どものターゲットとして、多くの小学校に広報すれば、参加者を「広く、薄く」集めることができると示唆される。

このような親子向けの歩測を体験するイベントは、将来小学校教員になる大学生が子どもと接する機会として貴重であり、大学周辺の住民が大学に親しみを持ってもらうことにも資するものである。今回の

反省点、改善点を踏まえて、より多くの親子に参加してもらえよう  
な歩測を体験するイベントを検討したい。

#### 謝辞

帝京科学大学教育人間科学部学校教育学科小学校コースの学生には、今回のイベントの活動全般を行ってもらった。足立区立千寿桜小学校の副校長先生には、チラシの配布に便宜を図っていただいた。参加者には、写真撮影を許可していただいた。本活動は、帝京科学大学地域連携推進センターの令和6年度学生の地域連携活動助成を受けて実施した。以上、深く感謝いたします。

#### 註

- \*1 「測量の日」パンフレット。  
<https://www.jsurvey.jp/soknohi/soknohi2024.pdf>.
- \*2 公益社団法人日本測量協会「測量の日」について。  
<https://www.jsurvey.jp/sok.htm>.
- \*3 令和6年度測量体験イベント「稲佐山ではかろう！」。  
<https://nagasaki-sokuryou.com/blog/2024-06-01%E3%80%80>.
- \*4 測量体験学習。  
<https://www.nasokyo.jp/activity/taiken/>.

#### 引用文献

- 1) 国土地理院総務部・国土地理院企画部 (1989) 測量法満40年を機に6月3日を「測量の日」に制定. 建設月報, 42 (5), 60-63.
- 2) 渡辺一郎 (2003) 伊能忠敬測量隊. 小学館.
- 3) 寺本潔 (1983) 児童の歩測による地図づくり. 新地理, 31 (3), 13-17.
- 4) 植木岳雪 (2022) 隅田川の堤防上における親子を対象とした星空観望会: 大学の立地とリソースを生かした地域貢献. 帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」, 6, 17-20.
- 5) 植木岳雪 (2023) 足立区のまちづくりとしての親子むけ星空観望会: 手作り望遠鏡の工作を中心に. 帝京科学大学総合教育センター紀要「総合学術研究」, 6, 73-80.
- 6) 植木岳雪 (2023) 大学近隣の親子を対象とした「石割り」体験会の報告. 帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」, 7, 21-25.
- 7) 植木岳雪 (2024) 大学近隣の親子を対象とした石割り体験会: 2023年度の報告. 帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」, 8, 26-30.
- 8) 植木岳雪 (2025) 大学近隣の親子を対象とした石割り体験会: 2024年度の報告. 帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」, 9, 30-33.

# 地域と学生が共に育つスポーツクラブ実践 -地域スポーツクラブ「デカキッズ」での取り組み-

持田尚（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：地域連携、大学、学生、陸上競技、混成競技、七種競技



## 1. はじめに

学校教育学科では、地域との連携を通して学生が実践的な学びを積み重ね、教育現場で求められる多様な力を養うことを重視している。特に、子どもとの関わりや教育的配慮、安全対応といった教育的実践力を、日常の中で体得する機会として、地域連携活動が積極的に展開されている。その中でも「デカキッズ<sup>①</sup>」は、学科公認の教育支援サークル「SAT (Student Assistant Teacher)」の主要な活動の一つとして位置づけられており、小中高生を対象に、学生が主体的に指導に関わる陸上競技教室である。大学ガイドブックにも紹介されるなど、学内外で注目を集めている本活動は、学生の成長と地域への貢献が相互に作用する新たな教育モデルとして機能している（図1）。

本稿では、学生が「デカキッズ」の活動を通してどのように教職志望者として成長していくのか、また地域の子どもたちにとってどのような教育的価値をもたらしているのかを整理し、教員養成における地域連携の意義と可能性を考察する。



図1 学生と子どもたちによるデカキッズ活動の様子

## 2. 活動概要と運営体制

「デカキッズ」は、帝京科学大学北千住キャンパス（7号館・4号館）の陸上競技場（トラック&フィールド）を拠点に、週2回（月曜日・金曜日）実施される小中高生向けのスポーツクラブ活動である。小学1年生から高校3年生までの子どもたちが、「キッズ・ジュニアクラス」「競技会クラス」「ユースクラス」に分かれ、それぞれの発達段階やニーズに応じた指導が行われている。

2025年度現在の在籍状況は、月曜日活動においては計58名（うち女子25名）、金曜日活動では計37名（うち女子14名）であり、地域の保護者からの信頼も厚い。

指導にあたるのは、本学の中高保健体育コースの学生である。学生は1年次にアシスタントとして参加し、2年次で指導補助、3・4年次には主任として全体指導や運営に携わるといった段階的育成が行われている。教員はゼミ活動を通じて学生の活動を支援し、教育的な振り返りやメンタリングを重ねることで、学生の成長と教育的実践を接続している。

さらに、活動の魅力として、参加者の多くが「大学施設でスポーツ活動ができる安心感（84%）」「質の高いグラウンド環境（88%）」に高い評価を示しており、大学の教育資源を地域に還元するモデルケースとしても機能している（2024年度保護者アンケートより）。

こうした背景のもと、「デカキッズ」は単なる課外活動にとどまらず、地域貢献と教職育成の両輪を担う、学内外に開かれた教育実践のフィールドとして、今後ますますの発展が期待される（図2）。



図2 デカキッズホームページ写真<sup>②</sup>

## 3. 教職志望学生の成長と学び

学生たちは、児童との継続的な関わりを通じて、単なる指導技術ではなく、児童理解・支援的コミュニケーション・保護者対応・危機管理能力といった教職に必要な幅広い力を実地で養っている。ある女子学生は、当初「女性指導者では頼りなく見られるのでは」という不安を抱いていたが、成功体験と保護者や後輩からの信頼を積み重ねていく中で、強いリーダーシップを発揮するまでに成長した。学生同士での振り返り活動や教員によるフィードバックも、指導観の形成において重要な役割を果たしている。

4年間の自己エスノグラフィーを通じて、学生指導者は以下のような段階を経て教職コンピテンシーを形成した<sup>③</sup>。

- 見習い期：上級生の模倣を通じて基本的な指導技術を習得。
- 葛藤・転換期：自らの指導観に悩み、教員の支援を受けながらスタイルを模索。
- 確立期：指導方針を明確にし、保護者対応や後輩育成など組織運営にも取り組む。

特に、女性指導者としては、ジェンダー的偏見や信頼構築の困難さに直面しながらも、主体的実践と成果の可視化を通して乗り越えていったことは、今後の指導者育成に重要な示唆を与えている。

#### 4. ヘプタスロン体験活動の導入

活動の中で特に注目すべきは、2023年度より導入された「ヘプタスロン体験活動」である。七種競技に含まれる多様な運動（短距離、跳躍、投てきなど）を“遊び”として体験できるこの活動は、競技化されすぎたスポーツ指導とは一線を画し、楽しさと挑戦心を引き出す工夫が随所に施されている。運動が苦手な子どもも参加しやすく、身体リテラシー（意欲、自信、能力、理解）を自然に育む設計になっている。また、学生にとっても、児童の自由な動きをどう引き出すか、どう安全に導くかといった“観察と応答”の力が求められ、指導力の底上げにつながっている。

#### 5. 国際的視点からの改善提案

クラブ活動に取り組む学生の中には、海外の陸上競技イベントに参加・見学する機会を持つ者もいる。特に、アメリカの陸上競技クラブ（SC Flight Track Club : <https://scflight.com/>）に1年間留学し、現地での指導を直接体験した学生のケースがある。彼女は、アメリカの大会では音楽・歓声・パフォーマンスによって観客との一体感を高める工夫が多く取り入れられていることに注目した。一方、日本の大会では静寂と秩序が重んじられる傾向にあり、観ている側の高揚感や参加意識に乏しい面があることに課題を感じた。



図3 アメリカの大会風景

この経験から、彼女は「もっと観ていて楽しい・参加して楽しい大会を日本でもつくりたいか」との問題意識を持ち、地域大会での音響演出の導入や観客参加型の試みを提案した。こうした視点は、競技の純粋性を損なうことなく、スポーツイベントの文化的多様性を取り入れるものであり、地域住民を巻き込んだ運営の可能性を広げる実践的提案として意義深い<sup>3)</sup>。

#### 6. 地域連携の意義と波及効果

「デカキッズ」は、大学・学生・地域が連携して教育活動を展開するモデルとして、教育的・社会的に高い価値を有している。大学にとっては教員養成課程における実践の場となり、学生にとっては自己効力感や職業的アイデンティティを育む機会として機能している。さらに、地域にとっては、安心・安全に子どもを預けられる信頼性の高い運動環境の提供という社会的意義を果たしている。

2024年度に実施された保護者アンケートでは、「指導者（学生）の態度・指導」に対して84%が満足またはやや満足と回答し、「レッスン内容」についても88%が肯定的評価を示した。総合満足度では76%

が「満足」「やや満足」と回答し、「やや不満」はわずか4%にとどまった（図4）。

これらの結果から、学生の指導態度やレッスン内容は一定の信頼を得ており、教育活動としての質の高さと、地域社会からの評価の両面が確認できる。今後も、大学の専門性と地域ニーズをつなぐ中核的な教育実践としての展開が期待される。

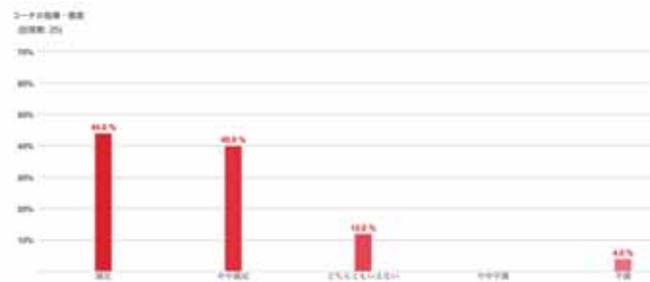


図4 「指導者（学生）の態度・指導」の保護者による評価

#### 7. 課題と今後の展望

一方で、課題も少なくない。指導学生の入れ替わりによって生じる指導力のばらつき、女性指導者への精神的サポートの不足、活動と授業との接続の弱さなどが挙げられる。これらの課題に対しては、段階的な育成カリキュラムの明文化や、教員によるメンタリング制度の導入、教職課程と連動した授業設計の工夫が求められる<sup>1)</sup>。今後はこうした取り組みを強化し、「デカキッズ」を単なる地域活動にとどめず、教職養成と地域連携を融合した実践的教育プラットフォームとして発展させていきたい。陸上競技に限らず、バスケットボールやバレーボールなど他の部活動との連携により、学生が週1回地域と関わることで、大学内に多様な実践機会を創出することも可能である。

また現在、学校部活動の地域移行<sup>4)</sup> <sup>5)</sup>が全国的に進められており、地域における継続的なスポーツ指導体制の整備が喫緊の課題となっている。実際に近隣中学校では陸上競技部が設置されておらず、「デカキッズ」が子どもたちにとって唯一の競技継続の場となっているケースもある。こうした実態は、本クラブの存在意義をより明確に示している。

このような背景を踏まえ、「デカキッズ」の運営はNPO法人の総合型地域スポーツクラブと連携しつつも、学校教育学科の専門性と連動する点に最大の意義がある。大学が単に場所を提供するにとどまらず、教育的専門性に基づく指導体制を担うことで、持続可能かつ教育的価値の高い地域モデルの構築が可能となる。

#### 8. まとめ

本稿では、帝京科学大学の地域スポーツクラブ「デカキッズ」における実践を通して、教職志望学生の成長と地域への貢献が相互に作用する教育モデルについて検討した。

学生は、学年ごとの段階的育成を通じて、児童理解や保護者対応、指導計画、組織運営に至るまで、多面的な教育実践力を養っている。特に、ジェンダー課題に向き合う女性学生や、国際的な視点から改善を提案する学生の姿は、現代の教育現場に必要な実践知を体現するものであった。

一方、地域の子どもたちにとっては、継続的な運動経験と大学の専門的な教育資源に触れることで、基礎的な運動能力と身体リテラシー<sup>6)</sup>

## 地域と学生が共に育つスポーツクラブ実践 ー地域スポーツクラブ「デカキッズ」での取り組みー

を育む貴重な機会となっている。保護者との信頼関係も徐々に構築されつつあり、地域に開かれた教育の場としての意義も明らかである。

また、部活動の地域移行が進む中で、「デカキッズ」は学校教育の補完的役割を果たす存在としても注目されている。大学の専門性に基づく継続的な指導体制のもと、地域スポーツの新しい担い手としての役割を果たしつつ、学生の学びと社会的実践を融合させるモデルとしての可能性を秘めている。

今後も本学が主体的に関わりながら、他競技への展開、地域スポーツクラブとの協働を進めることで、足立区を中心とした地域との持続可能な教育・地域連携のあり方を模索していきたい。

### 補注

※「部活動の地域移行」とは、教員の負担軽減や専門的指導体制の確保を目的として、これまで学校内で行われていた部活動を、地域のスポーツ団体などへ段階的に移行していく文部科学省主導の取り組みである<sup>(4)</sup>。

### 参考文献

- 1) 牛嶋莉帆 (2025) 『地域スポーツクラブでの指導経験を通じた教職コンピテンシー形成過程』 帝京科学大学卒業論文
- 2) デカキッズ公式ホームページ (2025)  
[https://sportskazoku.com/decakids\\_kitassenju/](https://sportskazoku.com/decakids_kitassenju/) (参照日: 2025年4月22日)
- 3) 中島ゆず菜 (2025) 『日米の陸上競技大会における雰囲気づくりの比較研究』 帝京科学大学卒業論文
- 4) 文部科学省 (2022) 『学校における働き方改革の一環としての部活動改革について (通知)』 [https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt\\_kyoiku02-000023590\\_2-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt_kyoiku02-000023590_2-1.pdf)
- 5) Sport for Life. (2019). *Long-Term Development in Sport and Physical Activity 3.0* <https://sportforlife.ca/wp-content/uploads/2019/06/Long-Term-Development-in-Sport-and-Physical-Activity-3.0.pdf>

# 中学生が地域の災害脆弱性を知るための体験授業

植木岳雪（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：体験授業、中学生、災害脆弱性、実体視、足立区



## 1. はじめに

帝京科学大学は、学生と教員が地域のさまざまなステークホルダーと協働し、地域社会に貢献するための地域連携活動を推進している。例えば、足立区内の子どもたちに大学の持つリソースを生かした体験活動を通して、学びのおもしろさに気づいてもらい、自分の成長や進路を考えてもらうことを目指して、幼児から中学生までを対象としたさまざまな体験プログラム（「夢の体験教室」<sup>1)</sup>、「のびのびプレイデイ」<sup>2)</sup>、「体験！一日大学生」<sup>3)</sup>など）を足立区と連携して実施している。また、足立区内の学校の児童・生徒を受け入れて、大学教員による体験授業も行っている。2024（令和7）年3月には、足立区立中学校の生徒に対して、学校教育学科の教員による体験授業を行った。本報告では、その中で著者が行った防災に関する授業を紹介する。

## 2. 体験授業全体の流れ

2024（令和7）年3月3日（月）14時30分から15時50分まで、足立区立谷中学校2年生に対する体験授業が行われた。この授業は、総合的な学習の時間の中でキャリア教育と国際理解教育の一環とするものであった。

前半（14時30分から15時05分まで）は、生徒を一括して、中高英語コースの馬場千秋教授が英語教育の授業を行った。授業の場所は、帝京科学大学7号館7403教室とした。後半（15時15分から15時

50分まで）は、生徒を二分して、中高理科コースの筆者が7403教室で防災に関する授業を行い、中高英語コースの櫻井丈准教授が7402教室でイスラムの生活文化に関する授業を行った。

## 3. 防災に関する授業の概要

### （1）講義（5分間）

授業に参加した生徒は、約40名であった。まず、将来の地域社会を担う中学生に大事なこととして、「温故知新」、「所変われば品変わる」、「グローバル」という3つのキーワードを示した（図1-1、図2-1）。防災に関しては、「温故知新」は、過去の自然を調べると、現在の自然がわかり、将来の自然が予測できることを意味している。「所変われば品変わる」は、場所によって災害が異なり、対応も異なることを意味している。「グローバル」は、グローバルな自然の変化がローカルな自然と災害に影響を及ぼすことを意味している。そして、高校までの学習では解が1つの問題を取り扱うが、大学からは解のない問題を取り扱うことを示した（図1-2）。その例として、地球温暖化と災害を挙げ、自分で考え、判断し、責任を持つことが重要であるとした。さらに、関東平野と東京下町の地形の陰影起伏図によって、足立区は周辺を台地に囲まれ、大川が流れている低地に位置し、荒川や中川が氾濫すると、甚大な浸水被害が生じること、すなわち災害脆弱性が高い地域であることを説明した（図1-3）。



図1 防災に関する授業で使用したスライド

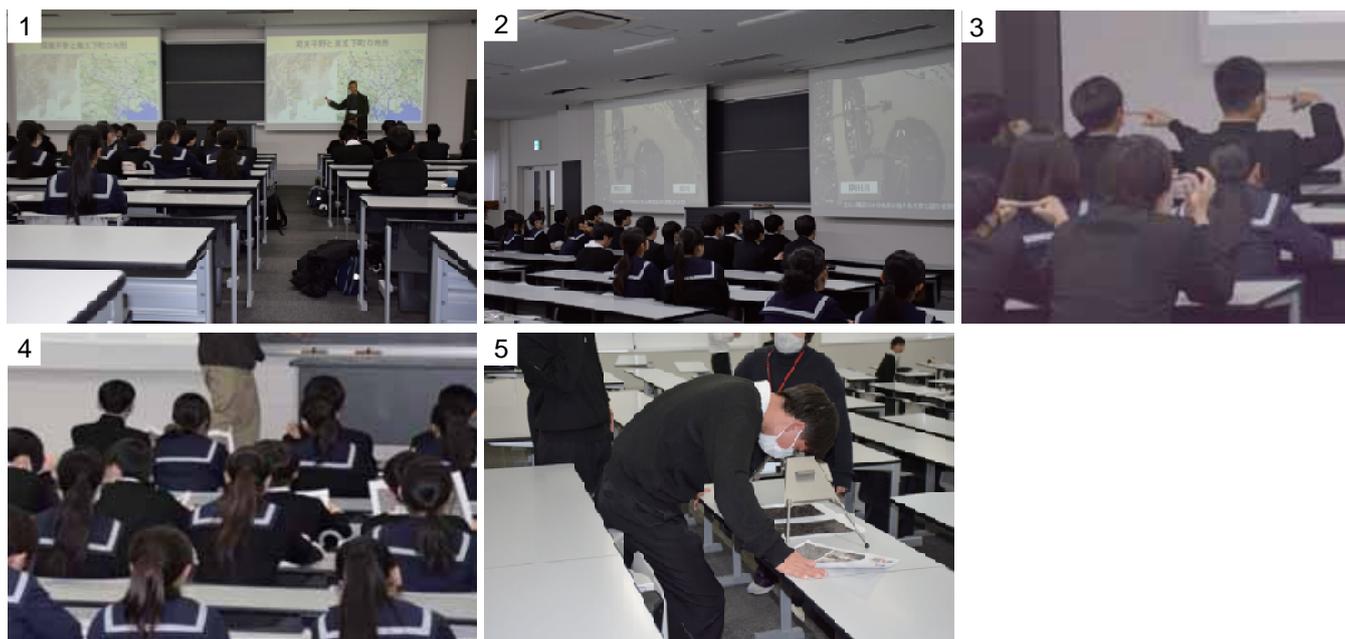


図2 生徒の様子

(2) 動画の視聴 (7分間)

国土交通省荒川下流河川事務所による「荒川氾濫」\*1の一部を視聴した(図1-4、図2-2)。荒川が氾濫すると、東京駅や北千住駅付近でどれくらい浸水し、どのような被害が起こるかを確かめた。

(3) 講義 (5分間)

まず、2015年9月10日の茨城県常総市<sup>じょうそう</sup>水害では、鬼怒川<sup>きぬがわ</sup>の氾濫による浸水範囲・浸水深<sup>4</sup>が低地の微地形に規制されており、国土地理院による常総市周辺の治水地形分類図\*2の地形区分や、常総市発行のハザードマップ\*3の浸水予想と一致していたことを示した(図1-5)。そのため、地形を見る目を養うことが重要であるとした。

地形の凹凸に気付き、地形の成り立ちを考えることを目標として、小学校の社会科の教科書に載っている地形図と、インターネットで見られる地形図を示した(図1-6)。一般に、地図記号はよく知られているが、地形図の等高線から尾根や谷、斜面の緩急を読み取るのには慣れが必要である。そして、帝京科学大学から谷中中学校にかけての低地の地形を見るために、国土地理院による地理院地図\*4の標準地図と陰影起伏図を並べて示した(図1-7)。この地域は平坦で、家屋が密集しているため、カラー表示の標準地図では微地形が判読できないが、陰影起伏図では判読できる。例えば、北千住駅に西側には、北北東に伸びる高まりが認められる。さらに、埼玉大学教育学部谷謙二氏による「今昔マップ」\*5によって、明治期の地形図と地理院地図の標準地図を並べて示した(図1-8)。この地域は都市化が進み、河川改修や交通網の整備によって、標準地図では微地形が判読できないが、明治期の地形図では判読できる。明治期にはいくつかの河川が並行して流れ、その周囲には水田が広がり、集落が固まって分布していた。水田と集落の位置は、それぞれ氾濫原の平坦地と自然堤防の高まりに対応している。

(4) 空中写真の実体視 (15分)

地理院地図の陰影起伏図では微地形を判読することが可能であるが、ある程度の地形の知識が必要で、慣れていないと難しい。一方、撮影場所をずらした2枚の写真を用いて、風景や地形を立体的に見ることを実体視という。実体視は、肉眼や専用の機材を用いて、誰でも簡単にできる。

まず、実体視の準備として、生徒に自分の人差し指を顔の前で立てて、右目と左目の片方を開け、もう片方はつぶって見てもらった。右目と左目を交互に開けたり、つぶったりすると、人差し指が左右にずれることがわかる。これは、右目と左目で見える範囲が異なるからである。また、右手と左手の人差し指を顔の前でくっつけて、両指を見てももらった(図2-3、図3-1)。そのままでは両指が見えるが(図3-2)、1m先を見るようにピントをずらすと、両指にはさまれたソーセージ型の指が見える(図3-3)。

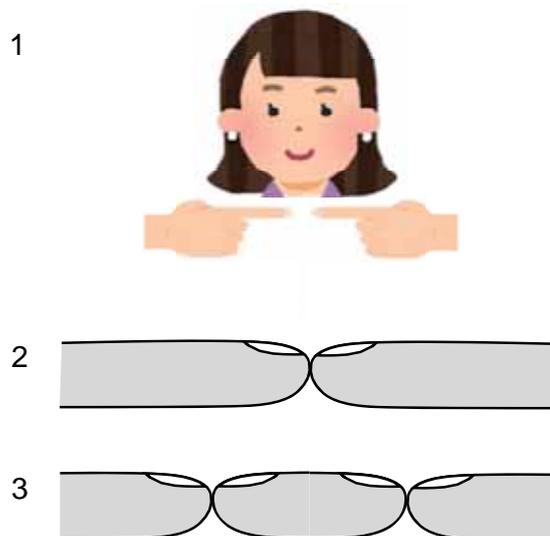


図3 自分の指による実体視の練習

そして、生徒にプリント（図4）を手に持って、1 m 先を見るようにプリントをずらして、コーラの缶の写真を見てもらった（図2-4）。そうすると、コーラの缶が3本に見え、真ん中の間が立体的に見える。それができたら、その他の写真を実体視してもらった。できない場合には、随時ソーセージ型の指の見え方を確認してもらった。また、途中で交代しながら、反射式実体鏡を用いて、谷中中学校付近の空中写真を見てもらった（図2-5）。

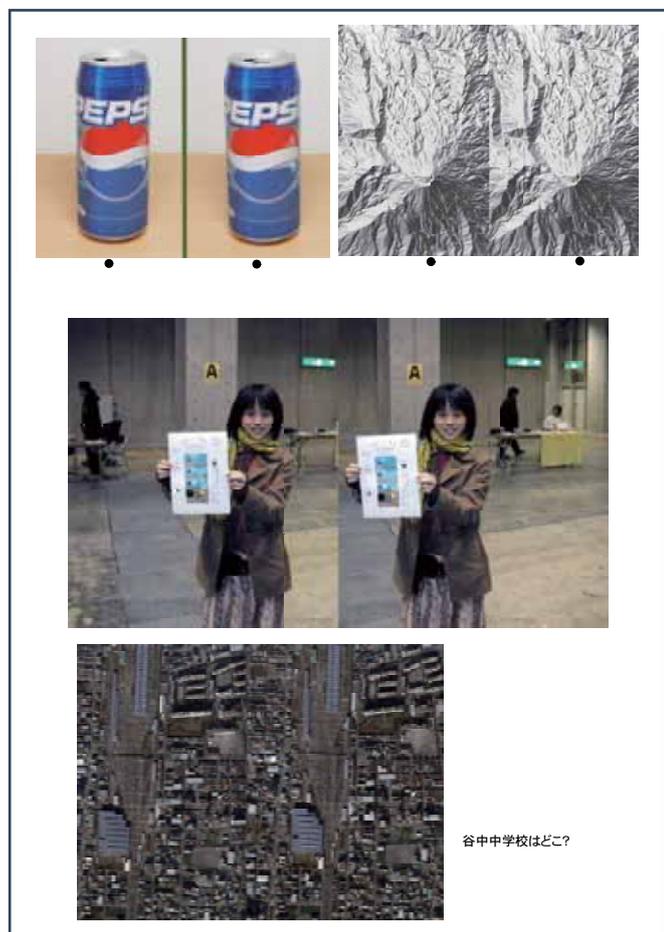


図4 実体視のプリント

最後に、空中写真を用いた実体視の原理を説明した（図5）。空中写真は、航空機が移動しながら地上を撮影した写真である。地点AとBでは、それぞれ範囲XとYの写真を撮影したとする。範囲Xの写真を見れば、範囲Yの写真を右目で見ると、地形が立体的に見える。それは、地点Aに左目、地点Bの右目がある大男がいて、地形を見ているのと同じである。反射式実体鏡は、鏡やプリズムを用いて、左目で左側の写真、右目で右側の写真が見えて、必ず実体視ができるようになっている。

#### (5) まとめ (3分間)

授業のまとめにあたって、谷中中学校は東京下町の低地にあるため、荒川や中川が氾濫すると、甚大な洪水の被害が生じることを強調した。2019（令和元）年の台風では、足立区でも河川が氾濫する危険が生じたことから、足立区内の小・中学校の外壁などに予想される最高水位を記載した「浸水深表示板」が設置されたことを踏まえて、生徒に中

学校の入り口横にある「浸水深表示板」（図6）を見てほしいと伝えた。一方、旧日光街道の商店街に沿っては、周囲より数10cm高くなっており、上野から北東に砂浜が伸びていたことを説明した。また、江戸時代に宿場町ができたのは、河川が氾濫しても浸水しにくいからであり、昔の人は微地形を防災に利用していたことも説明した。さらに、帝京科学大学から北千住駅まで帰るときに、商店街の高まりに気付いてほしいと話した。

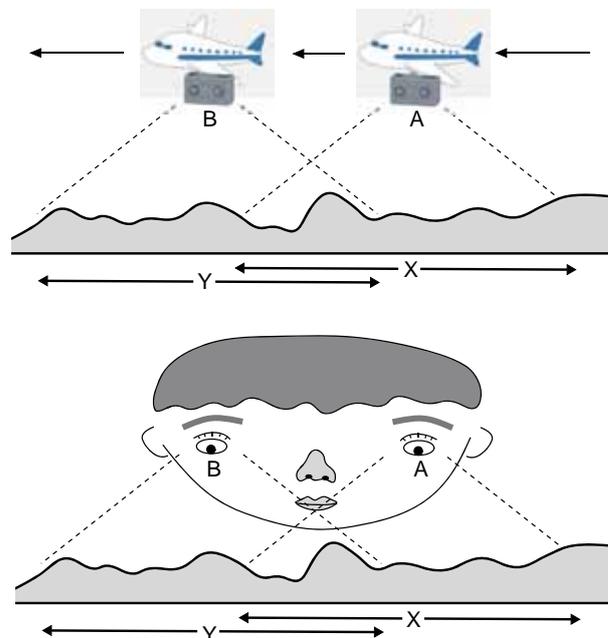


図5 実体視の原理



図5 谷中中学校の入り口横にある「浸水深表示板」  
Google map<sup>※6</sup>のストリートビューによる。

#### 4. おわりに

足立区は災害脆弱性が高い地域であるため、将来の地域社会を担う中学生に防災の意識を高めることは重要である。今回の授業では、生徒はみな積極的に活動し、楽しそうであった。また、足立区で起こり

うる災害を知って、地域の防災を考える機会になったようである。

足立区立谷中学校は、2025（令和7）年以降も帝京科学大学における体験授業を計画している。その際には今回のような防災に関する体験授業を行い、大学の地域連携活動として地域に貢献したいと考えている。

#### 註

- \*1 フィクションドキュメンタリー「荒川氾濫」 H29 3 改訂版。  
<https://www.youtube.com/watch?v=h3Yy1csx0yU>.
- \*2 治水地形分類図の閲覧 利根川・荒川水系。  
<https://maps.gsi.go.jp/#11/36.054095/139.886169/&base=std&ls=std%7C1cmfc2%7Chillshademap&blend=01&disp=111&lcd=hills-hademap&vs=c1g1j0h0k010u0t0z0r0s0m0f1&d=m>.
- \*3 常総市洪水ハザードマップ。 [https://static.ibaraki-ebooks.jp/actibook\\_data/n20140922\\_josocity\\_floodmap/HIIML5/sd.html#/page/1](https://static.ibaraki-ebooks.jp/actibook_data/n20140922_josocity_floodmap/HIIML5/sd.html#/page/1).
- \*4 地理院地図。 <https://maps.gsi.go.jp/>.
- \*5 今昔マップ on the web。 <https://ktgis.net/kjmapw/>.
- \*6 Google map。 <https://www.google.co.jp/maps/?hl=ja>.

#### 引用文献

- 1) 植木岳雪・大日向浩・倉山智春・小池守（2024） 中高理科コースの大学1年生による児童に対する体験型科学教室：2023年度「夢の体験教室」の実施報告。帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」，8，22-25.
- 2) 飯泉祐美子・木場有紀・富岡麻由子（2019） 「のびのびプレイデー」三年間の取り組み。帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」，3，37-40.
- 3) 花園誠（2027）黎明「地域社会との共創」：「体験！一日大学生」創案の経緯。帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」，4，7-17.
- 4) 山本晴彦・野村和輝・坂本京子・渡邊薫乃・原田陽子（2015） 2015年9月10日に茨城県常総市で発生した洪水災害の特徴。自然災害科学，34，171-187.

# 「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」

榊原健太郎（総合教育センター）

キーワード：対話型教育プログラム、小学生とその保護者、ラグビー、哲学対話、産官学連携、足立区



## 1. はじめに

周知の通り、現在、多くの大学ではいわゆる教育や学術研究のみならず、大学の知のリソースを地域や社会に還元する地域貢献や社会貢献をミッションとしている。

本学が公表するところの「TEIKA VISION 2030」(令和6(2024)年1月改定)においては、それらに関連するステートメントとして次のものを見ることができる。「教育のための実践的な研究を推進し、研究の知見と教職員・学生の行動力により持続可能な社会の発展に貢献します」(「将来ビジョン」)。また「中期目標・計画(2022年度～2026年度)」の5つの項目の一つ「V. 地域連携、グローバル化」では、「目標」として「地域社会との共創」が明記され、「持続可能な地域社会の発展のため、自治体・関係係機関等と連携し、本学の資源・特性を生かした特色ある活動を行います」とも謳っている。

上記の内容を視野に収めつつ、帝京科学大学地域連携推進センターでは、令和6年度の重点事業「共創的な地域連携推進活動における「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究推進活動」の一環として、一般社団法人日本スポーツ教育アカデミーとの連携事業「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」を実施した。本稿では、当該事業の概要を紹介することを通して、大学における地域貢献や社会貢献のあり方の一例を提供する。なお、学術的な内容については別稿を予定している。

## 2. 実施概要

### 2-1. 開催日時・会場等

事業名称：「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」

日時：2025年3月9日(日) 14:00-16:00

会場：帝京科学大学千住キャンパス 4号館グラウンド

連携機関：一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー

後援：足立区

### 2-2. 対象、及び参加者数

対象：足立区在学・在住の小学生とその保護者

参加者数：小学生20名(保護者合計20名)

参加費用：無料

### 2-3. 講師(監修者)情報

#### ◆ラグビー教室

吉田義人氏

ラグビー元日本代表。ラグビー日本代表としてラグビーワールドカップ2回出場。世界最強フィフティーンである「世界選抜」に3度選抜された唯一の日本人選手。自治体・企業等での講演・研修等の講師実績多数。一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー理事長、他。

#### ◆哲学対話教室

榊原健太郎氏

哲学者。国際哲学オリンピック本部運営理事会理事及び審査員。国際哲学オリンピック日本組織委員会副委員長。国際教育機関・自治体・企業等での講演・研修等の講師実績多数。帝京科学大学准教授、他。

## 3. 実施詳細

### 3-1. 「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」とは

「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」の概要については、次の通り告知した(図1)。

帝京科学大学と日本スポーツ教育アカデミーとを中心とする研究グループが開発した「親子 de ラグビー & 哲学対話教室」は、ラグビーと「哲学対話」(※)を相乗的に組み合わせたユニークな教育プログラムである。

(※)哲学対話とは、一般に、哲学者がファシリテートしながらテーマについて複数人で自由に対話し、ひとりひとりの前提や文脈を分かち合い、物事に対する見方考え方をアップデートしていく対話手法。

#### その魅力

1. 休日の午後に、親子で参加できる。
2. スポーツやラグビーが初心者の子どもでも(また保護者でも)、安心して参加することができる。
3. 体を動かすことと心を育てることを全体的・統一的に捉える学びを体験できる。
4. 学習とスポーツとの人間発達上の関係について学ぶ体験ができる。
5. 講師陣が、ラグビーや哲学の分野で世界の第一線で活躍する方々であり、各種国際教育機関・自治体・企業等での研修・教育の講師実績を多数誇る。

### 3-2. タイムテーブル(運営スタッフ側レベル)

13:15 全スタッフ・選手会場集合。朝会。会場準備

13:40 参加者受付開始

14:00～16:00 教室実施

① 14:00 はじめのことば(開催の趣旨) [担当:榊原健太郎、吉田義人]

② 14:05～「ラグビー教室」(休憩含め、85分以内程度) [担当:吉田義人、ジェントルマン(団体)、サムライセブン(チーム)、他]

- ⑤15:30(頃)～(「ラグビー教室」の体験を「哲学対話」という手法でグループ対話・探究する)「哲学対話教室」(教室全体のまとめ含めて、25分以内程度) [担当: 榊原健太郎、サムライセブン(チーム)、他]
- ④15:55～16:00 終わりの言葉 [担当: 榊原健太郎、吉田義人]
- ⑥16:00～17:00 サムライセブンによるラグビー練習 (参加者見学可) (17:00 グラウンド完全撤収)



図2. オープニング風景



図3. ラグビー教室内のミニゲーム(タッチゲーム)の様子



図4. 哲学対話のウォーミングアップの様子 (左図・右図とも)



図5. 哲学対話の風景の一コマ

**帝京科学大学**  
 帝京科学大学×日本スポーツ教育アカデミー  
**親子deラグビー&哲学対話教室**  
 参加費 **無料** (事前申し込み制)  
**3月9日(日)**  
**14:00～16:00**  
 会場: 帝京科学大学4号館グラウンド  
住所: 東京都足立区千住4-1-1  
**対象: 足立区在学の小学生と保護者**  
**参加募集人数: 25組(50名)**  
 講師 (ラグビー) **吉田 義人 氏**  
ラグビー元日本代表、一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー理事  
 講師 (哲学対話) **榊原 健太郎 氏**  
国際科学オリンピック、国際科学オリンピック、国際科学オリンピック、帝京科学大学准教授  
**好評につき 若干組(名)追加募集!**  
**「締め切り」間近です!**  
**(申し込み方法は、こちらへ)**  
 事前申し込み方法は、こちらをご覧ください  
 帝京科学大学地域連携推進センター

図1. 配布チラシ

### 3-3. プログラムの進行

- ・オープニング (あいさつ、指導者・参加者相互紹介) (図2)
  - ・からだところのウォーミングアップ
  - ・ラグビー教室のスタート
  - ・親子でのハンドリングスキルアップ
  - ・各年代・経験有無等に分けて、ミニゲーム(タッチゲーム)前の練習
  - ・各年代・経験有無等に分けてのミニゲーム(タッチゲーム) (図3)
  - ・哲学対話教室のスタート
  - ・哲学対話のウォーミングアップ (図4)
  - ・哲学的な対話の体験スタート
  - ・ラグビー指導スタッフと小学生の哲学対話 (小グループ)
  - ・哲学対話指導監修者と保護者全員との哲学対話 (図5)
  - ・全体での対話結果のシェアリング
  - ・親子での「哲学対話」
  - ・体験のシェア
  - ・クロージング (おわりのあいさつ) & 記念撮影
- (\*) 途中休憩あり。また内容は教育上の配慮から一部変更される場合あり。

### おわりに

本教室は盛況のうちに終了した。このプログラムは小学生とその保護者を対象としたものであったが、参加者はラグビーのミニゲームを体験しながら単にルールに親しむだけでなく、哲学対話を通じてラグビー文化の背景にある「モノの見方や考え方(哲学)」やラグビー競技(やプレーヤーの姿勢や態度の規律・柔軟性)が持つ独特の美しさや魅力を、親子で一緒に探求した。ラグビーの楽しさと、深く考える対話の面白さを同時に体験できる「新しい形の教育機会」の創出を、参加者一同、共に分かち合ったといってさしつかえないだろう。

最後に、参加者の皆様をはじめ本事業に関心をお寄せ下さった皆様、本事業の推進・実施にあたってご尽力頂いた一般社団法人日本スポーツ教育アカデミーの関係各位、後援を頂いた足立区の関係各位、そして本事業に様々にご助力くださった本学教職員・学生の皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

# 大学近隣の親子を対象とした石割り体験会：2024年度の報告

## 植木岳雪（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：石割り、深成岩、変成岩、石灰岩、小学生、千住地区、地域連携



### 1. はじめに

帝京科学大学教育人間科学部学校教育学科の植木研究室では、大学周辺に居住する子どもと保護者を対象として、毎年、小学校教員を目指す大学生による「石割り」体験会を実施している。その目的は、東京都足立区のような自然に乏しい地域の子どもの、岩石や地質への興味・関心を高め、非日常的な自然体験や身体的・感覚的な活動を提供することである。2024年度の「石割り」体験会は、2023年度の活動内容・方法を踏襲しつつ、別の岩石を用意して行ったところ、とても盛況であった。本報告では、2024年度の「石割り」体験会の概要を紹介する。

### 2. 用意した岩石

今回の「石割り」体験会では、6種類の岩石を用意した。すなわち、中学校理科の教科書に載っている6つの火成岩の中から、はんれい岩、閃緑岩、花崗岩、高等学校理科地学の教科書に載っている変成岩の中から、結晶片岩として黒色片岩、緑色片岩、中学校理科の教科書に

載っている堆積岩の中から、<sup>せつがい</sup>石灰岩である。

はんれい岩と花崗岩は、2022・2023年度の「石割り」体験会で用意したものと同じである。閃緑岩を採取した地点の位置を図1-1に示す。地点1（北緯36度45分13.96秒、東経140度22分4.81秒）は、茨城県久慈郡大子町大字南田気である、ここでは、ジュラ紀の袋田岩体を構成する閃緑岩<sup>2,3</sup>が道路脇に露出している。

黒色片岩と緑色片岩を採取した地点の位置を図1-2に示す。地点2（北緯36度4分52.90秒、東経139度6分38.25秒）は、埼玉県秩父郡皆野町大字皆野の荒川の河原にある「<sup>みなの</sup>みな親鼻河原」である、ここでは、周辺山地を構成する三波川<sup>さんぱがわ</sup>変成岩類<sup>4</sup>の円礫が駐車場脇に集積している。

石灰岩を採取した地点の位置を図1-3に示す。地点3（北緯34度20分6.90秒、東経136度26分40.12秒）は、三重県渡会郡大紀町阿曾の「<sup>わたらい たいき</sup>八重谷湧水汲み場」の駐車場脇である、ここでは、周辺山地を構成するジュラ紀の石灰岩<sup>5,6</sup>の角礫が崖錐として堆積している。なお、地点2でも石灰岩の円礫が少量みられ、採取可能である。



図1 岩石の採取地点

1 閃緑岩、2 黒色片岩と緑色片岩、3 石灰岩。基図は国土地理院の地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) による。

### 3. 日時、会場、対象および広報

今回の「石割り」体験会の日時は、2025（令和7）年2月15日（土）10:30～12:00とした。その理由は、この時期は年度末で小学校の3学期（2学期制の場合は後期後半）に当たり、公的機関による子ども向けの体験講座があまり開催されないこと、天候が安定しており、寒さが緩むこと、大学では春季休業中で授業が行われていないことである。子どもと保護者が気軽に参加できるように、事前予約は不要として、時間内に会場に来てもらうようにした。

会場は、帝京科学大学7号館横の隅田川の堤防上とした。この場所は2022・2023年度と同じで、親子向きの星空観望会を何回も行って

いるため、大学近隣の住民にはなじみがある。対象は小学生とその保護者とした。広報のチラシには前回までと同じイラストを用いた。およそ10日前から、大学近隣の集合住宅と掲示板にチラシを貼ってもらった。また、大学近隣の足立区立千寿桜小学校と千寿小学校の全児童に対して、約1,500枚のチラシを配布した。千寿桜小学校内の「さくらっこ学童保育室」の掲示板にもチラシを貼ってもらった。

### 4. 当日の様子

2022・2023年度の「石割り」体験会と同様に、会場には石選びコーナー、石割り用コーナー、標本製作コーナーの3つの活動場所を設

置した。石選びコーナーでは、あらかじめ6種類の岩石を小さく割り、洗面器に入れた。大きなものはコンテナボックスに入れた。そして、岩石ごとに洗面器とコンテナボックスを並べた。石割りコーナーでは、ブルーシートを広げ、クッションの上に金床を置き、岩石ハンマーを添えた。標本製作コーナーでは、長机2脚を並べ、プラスチックケースと綿、標本ラベル、説明シート、教科書のコピーを机の上に置いた。

会場全体の様子を図2-1に示す。大学生には、子どもと保護者を誘導したり、子どもが岩石を割ったり、標本を製作する際に補助したり、主体的に行動してもらった。石選びコーナーでは、子どもに各岩石からこぶしより小さなものを1つ選んでもらった(図2-2、2-3)。石割りコーナーでは、ゴーグルと軍手を着用してもらい、金床の上に置いた岩石を岩石ハンマーで叩いて、1~2cmサイズの破片にしてもらった(図2-4~2-7)。保護者には、随時ハンマーで岩石を割るのを手伝ってもらった。石割りコーナーが混雑して、待ち時間が生じた時を見計らって、著者が大型ハンマーで人頭大の岩石を割る演示を行った。

標本製作コーナーでは、子どもに各岩石の破片を、綿を敷いたプラスチックケースに入れ、その上に標本ラベル(図3)を載せて、岩石標本を製作してもらった(図2-8)。その岩石標本は、お土産として帰ってもらった。大学生の製作した岩石標本の見本を図2-9に示す。

子どもが6種類の岩石を割り、岩石標本を製作するためには、30~45分必要であった。保護者には深成岩の説明シートと、中学校の教科書のコピーを適宜持って行ってもらった。最後に、保護者と子どもにアンケート用紙を記入してもらい、自由解散とした。

会場は常に多くの参加者で賑わっており、子どもも保護者も楽しそうであった。参加者の正確な数は不明であるが、約100名の子どものほほぼ同数の保護者が参加したようであった。子どもは、岩石をハンマーで叩いて割ることに、無心に取り組んでいた。そのような子どもの様子を見て、保護者は微笑んでいた。また、保護者同士で話が弾み、盛んに交流していた。ある保護者によれば、岩石標本を製作するのは、ビーズ遊びのようで楽しいとのことであった。



図2 「石割り」体験会の様子

- 1 会場全体、2・3 石選びコーナーで子どもが岩石を選んでいる、4~7 石割り用コーナーで子どもが岩石を岩石ハンマーで叩いている、8 標本製作コーナーで子どもが岩石の破片をケースに入れている、9 大学生が製作した岩石標本の見本。

番号 4 岩石 はんれい岩 場所 筑波山(茨城) 採取日 採取者	番号 7 岩石 閃緑(せんりょく)岩 場所 大子(茨城) 採取日 採取者	番号 6 岩石 花崗(かこう)岩 場所 加波山(茨城) 採取日 採取者	番号 8 岩石 緑色片(へん)岩 場所 長瀬(埼玉) 採取日 採取者	番号 9 岩石 黒色片(へん)岩 場所 長瀬(埼玉) 採取日 採取者	番号 10 岩石 石灰(せっかい)岩 場所 大紀(三重) 採取日 採取者
--	--	---	--	--	--

図3 6種類の岩石の標本ラベル

## 5. 参加者による評価

アンケート調査には、28名の保護者から31枚、保護者が同伴しなかった2名の子どもから2枚の回答を得た。アンケート用紙の質問項目は2023年度と同じである。そのうち、「やってみてどうでしたか」と「おもったこと」の欄は、子どもに記入してもらった。

参加者は、小学1年生が12名、2年生が6名、3年生が3名、4年生が2名、5年生が2名、6年生が1名、幼児が7名であった。小学生は、低学年が最も多く、中学年から高学年にかけて少なくなった。参加者の小学校は、千寿桜小学校が19名、千寿小学校が6名、千寿双葉小学校が1名であり、幼稚園・保育園は全て千住地区であった。チラシを配布した小学校2校がほとんどを占めた。千寿小学校は、当日が土曜授業日にあたっていたため、やや少なかった。

子どもに対して、「石割り」体験を「やってみてどうでしたか」という質問項目では、「よかった」が32名、「いまいち」が1名であった。保護者によると、ハンマーで痛い思いをしたため、「いまいち」と回答したが、それまでは楽しくやっていたとのことであった。自由記述による子どもの感想(表1)からは、子どもはハンマーで岩石を割ることや標本を製作することを楽しいと感じていた。また、岩石の色、固さ、種類に違いがあることに気づいていた。自由記述による保護者の感想(表2)からは、非日常の体験ができたこと、親子で楽しめたことなどが好評であった。一方、安全確保の方法、解説の時間の必要性、物品の用意などについて、意見が出された。このように、今回の「石割り」体験会には、子どもと保護者はともにとても満足したようであった。

## 6. おわりに

2023年度と同様に、2024年度の「石割り」体験会にも多くの参加者があり、大変好評であった。親子で楽しく、非日常の体験ができたのが良かったと思われる。また、将来小学校教員になる大学生が子どもと接する機会としても重要である。この「石割り」体験会は、帝京科学大学の地域貢献活動として徐々に定着しつつあるようである。今後も、植木研究室を特徴づける活動として、大学生が主体となって継続したい。

過去の「石割り」体験会に参加し、今回も参加してくれた子どもがいた。2025年度は、新たにかんらん岩、石炭、軽石などの珍しい岩石を用意して、リピーターも満足させられる「石割り」体験会を実施する予定である。また、今回の参加者の意見を反映できるように、活動の方法を改善したいと思う。

## 謝辞

帝京科学大学教育人間科学部学校教育学科小学校コースの植木研究室と有志の学生には、今回の「石割り」体験会の準備から当日の運営まで、活動全般を担ってもらった。足立区立千寿桜小学校と千寿小学校の副校長先生には、チラシの配布に便宜を図っていただいた。参加者には、写真撮影を許可していただいた。本活動は、帝京科学大学地域連携推進センターによる令和6年度「学生の地域連携活動助成」を受けて実施した。以上、深く感謝いたします。

表1 自由記述による子どもの感想の例

- ・おもしろかった。
- ・すぐたのしかった。
- ・またあったらやりたい。
  
- ・もっとわりたい。
- ・いろんな石をわって楽しかった。
- ・いろいろのいしをわれて、いしのことをもっとしれた。
- ・わるのが楽しかった。ケースにコレクションするのが楽しい。
- ・意外とわりやすかったり、わりにくかったりした。
- ・いがいと石をわるのが大変だった。化石をほっている人の大変さがわかった。
  
- ・石の中の色が見えたり、石の外側がきれいだった。
- ・わったところによって、いろがちがった。
- ・かたいやつとやわらかいものがあった。
- ・いしがこんなにいろいろなしゅるいがあるんだと、勉強になりました。

表2 自由記述による保護者の感想の例

- 
- ・ 普段出来ない体験が出来た。子供達が夢中でやっていた。
  - ・ ふくいけんまで行ってやってきたけど、今回のほうがよかったです。
  - ・ 親もとても楽しめました。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。
  - ・ とても楽しんでいたので、来て良かったです。石に興味があるので、また来たいです。
  - ・ 子供でもわりやすい石が意外と多く、たのしそうでした。
  - ・ 石を割ることが初めてで、親子共々とても貴重な体験ができました。もっと石について学んでみたいと思いました。また色々体験があったら、参加してみたいです。ありがとうございました。
- 
- ・ 大変勉強になりました。持ち帰り用の入れ物の用意など、うれしかったです。
  - ・ 石の種類も多かったので、次はバルクなどもあると楽しそうです。
  - ・ ハンマーがおでこにあたってしまい、痛かったそうです。それまではたのしく参加させていただきました。左のやわらかい石は、小1の子でも割ることができて、よるこんでいました。
  - ・ お知らせをいただいた時から、とても楽しみにしていました。化石などが出るような石があると、より一層楽しめるかと思いました。高学年の子が子供だけで参加し、大きな石をカ一杯割っていて、破片がかなりの距離で飛んで、小さな子にあっていたので、少し気になりました。楽しい時間をありがとうございました。
  - ・ たのしかったようです。もう少しかいせつをその場でしていただけるとうれしいです。先生に都度聞いてましたが、もっと話をききたかったです。
  - ・ 割り方のコツも教えてほしかった。
- 

## 引用文献

- 1) 植木岳雪 (2024) 大学近隣の親子を対象とした石割り体験会：2023 年度の報告. 帝京科学大学地域連携推進センター年報「地域連携研究」, 8, 26-30.
- 2) 柴田賢・蜂須紀夫・内海茂 (1973) 八溝山地の花崗岩類の K-Ar 年代. 地質調査所月報, 24, 513-518.
- 3) 久保和也・柳沢幸夫・山元孝広・中江訓・高橋浩・利光誠一・坂野靖行・宮地良典・高橋雅紀・駒澤正夫・大野哲二 (2007) 20 万分の 1 地質図幅「白河」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 4) 須藤定久・牧本博・秦光男・宇野沢昭・滝沢文教・坂本亨・駒沢正男・広島敏男 (1990) 20 万分の 1 地質図幅「宇都宮」. 地質調査所.
- 5) 柏木健司・吉田勝次・稲垣雄二・近野由利子・鈴木健士・五藤純子 (2007) 紀伊半島東部の霧穴 (石灰岩洞窟) の地下地質と阿曾カルストの地質構造 (予察). 福井県立恐竜博物館紀要, 6, 35-44.
- 6) 西岡芳晴・中江訓・竹内圭史・坂野靖行・水野清秀・尾崎正紀・中島礼・実松建造・名和一成・駒澤正夫 (2009) 20 万分の 1 地質図幅「伊勢」. 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

# 学校教育学科学生による小学生児童を対象とした体験型科学教室： 2024年度「夢の体験教室」の実施報告

加藤大和・植木岳雪・大日向浩・倉山智春（教育人間科学部学校教育学科）

キーワード：科学教室、地域連携、足立区、小学生、夢の体験教室



## 1. はじめに

東京都足立区は、教育委員会と区内の大学との連携による子どもたちの体験活動を推進しており、各大学の特色を生かしたイベントを定期的に開催している。「夢の体験教室」は、足立区教育委員会と帝京科学大学との地域連携事業として2011（平成23）年に開始した。以降、企画と運営を担当する学生のコースや学年の変更や、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のための開催形態の変更を経ながら継続されてきた（神谷、2017；神谷・江田、2021；米田、2023；植木ほか、2024）。本報告では、2024年度に開催した「夢の体験教室」の内容について紹介する。

## 2. 事前の準備

2024年度の「夢の体験教室」は、学校教育学科中高理科コースの1年生29名と、同小学校コース「理科教材研究」を履修した4年生24名が担当し、企画・運営した。理科コースの学生は7から8名の4つのグループに分かれ、4名の理科コース所属教員が各グループをサポートした。前期必修の共通科目「基礎ゼミ」の時間を充てて、各グループで体験活動の内容を検討し、予備実験を数回行なった後に、他のグループの前で演示させた。「理科教材研究」の履修生は4つのグループに分けて植木がサポートし、授業時間を充てて同様に準備を行なった。

足立区教育委員会との調整の結果、2024年度の「夢の体験教室」は8月24日（土）の13～15時に開催することとなった。小学校4年生から6年生の児童を対象とし、定員は70名となった。広報のチラシ（図1）は教育委員会が作成し、区内の小中学校を通して児童に配布し、公共施設でも配架してもらった。また、区と大学のホームページにもチラシを掲載し、足立区の広報誌にも情報を掲載してもらった。参加の申し込みは区のホームページから行うようにし、締め切りを8月5日（月）としたところ、330名の申し込みがあった。そのため、抽選によって70名の参加者を決定した。



図1. 2024年度開催夢の体験教室のチラシ

## 3. 当日の流れ

「夢の体験教室」の体験活動の会場は、千住キャンパス7号館2階の理科実験室と通常教室2室（7201、7204教室）とした。また、受付を1階のピロティエ、控え室を2階の家庭科室に設けた。事前にキャンセルがあり、参加した小学生は合計59人であった。開始時間の5分前に趣旨説明を行い、理科実験室と2教室に誘導した。理科実験室では(1)「炎に色をつける マジカルファイヤー体験」、(2)「アルコール燃料ロケット」、(3)「ポップコーンは火山の爆発?」、7201教室では(4)「ブンブンバナリアイス」、(5)「飲み物大実験」、7204教室では(6)「ワクワク☆柔道教室」、(7)「例のブーツをつかんでみよう!」、(8)「ぐにやぐにや輪ゴムを転がそう」、(9)「スライムをつくろう」の体験ブースが展開された。

児童には、1つのブースでの活動が終わったら別のブースに移動してもらい、終了時には控え室に戻ってアンケート用紙に記入後、自由解散とした。

#### 4. 体験活動の様子

各ブースでの活動の内容を以下にまとめる。各ブースの様子を図2-10に示す。各ブースでは、学生が実験・製作の原理や手順を説明した後に、参加者に体験してもらった。

##### (1) 炎に色をつける マジカルファイヤー体験

担当：理科コース1年生大日向班

概要：ナトリウム・カリウム・銅の3種類の金属元素の炎色反応の実験・観察

内容：火・炎は燃える物質・金属の種類で色が変わる。塩化ナトリウム、塩化カリウム、硫酸銅の各粉末試薬をそれぞれ入れた3つのアルミカップに、児童が自ら洗瓶で蒸留水、マイクロピペットでエタノールを加え、ライターで着火した。炎の色がアルコールの青色からそれぞれ固有の炎色反応である黄色、赤紫色、青緑色に変わるのを観察してもらった。



図2. 「炎に色をつける マジカルファイヤー体験」の様子

##### (2) アルコール燃料ロケット

担当：理科コース1年生倉山班担当

概要：エタノールを燃焼させて紙コップを飛ばすロケットを作る

内容：300mLのボトル状のアルミ缶の下部に穴をあけ、エタノールを少しだけ入れたのちにふたを閉めて振り、空気とエタノールをよく混ぜる。ふたを取って紙コップをかぶせ、着火ライターで穴越しに内部のエタノール混合気体に火をつけると、エタノールが一気に燃え紙コップが飛ぶ。



図3. 「アルコール燃料ロケット」の様子

##### (3) ポップコーンは火山の爆発?

担当：理科コース1年生倉山班担当

概要：ガラス製の容器内で豆（トウモロコシ）からポップコーンができる様子を観察する

内容：ポップコーン用の豆はトウモロコシであるが、外側の皮が通常のトウモロコシよりもかたい爆裂種とよばれるものである。ガスコンロで加熱することができる種類のガラス製の鍋に油を敷き、ポップコーン用の豆を加熱すると、豆の内部の水分が水蒸気となり、かたい外側の皮が耐えきれなくなると爆発してポップコーンになる。これは、マグマに触れた水が水蒸気となって膨張し、岩盤を爆発的に吹き飛ばすマグマ水蒸気爆発と原理的には同じものである。



図4. 「ポップコーンは火山の爆発?」の様子

##### (4) 飲み物大実験

担当：理科コース1年生植木班担当

概要：コーラを自分で作る・バタフライピー茶の色の变化

内容：コーラはどのように作るのか、企業秘密である。さまざまなハーブと炭酸水を混ぜて、熱して、コーラもどき作り、飲んでもらった。意外に美味しいと評判であった。また、バタフライピー茶にレモン汁を加え、アントシアニン色素の色の变化を楽しみながら飲んでもらった。



図5. 「飲み物大実験」の様子

##### (5) プンブンバニラアイス

担当：理科コース1年生加藤班担当

概要：冷蔵庫を利用しないアイスクリーム作り

内容：氷に食塩を加えると凝固点降下が起こり、急激に温度が低下する。砂糖とバニラエッセンスを加えた牛乳を袋に入れ、氷と食塩ともに振り回すことで、即席のアイスクリームが完成する。学生による凝固点降下の原理の解説のあと、来場者にアイスクリームを作って食べてもらった。



図6. 「ブンブンバニラアイス」の様子

(6) ワクワク☆柔道教室

担当：小学校コース4年生理科教材研究履修生

概要：大学生を柔道の技で投げしてみる

内容：柔道の投げ技に、理科の支点・力点・作用点の考え方を応用して解説した。小学生に柔道着をきてもらい、柔道部の大学生を投げてもらった。大きな大人を投げられることに、小学生は鼻高々だった。



図7. 「ワクワク☆柔道教室」の様子

(7) 例のブツをつかんでみよう！

担当：小学校コース4年生理科教材研究履修生

概要：ダイラタンシー現象

内容：ダイラタンシー現象とは、液体と固体の粉末粒子の混合体に外力が加わると圧縮されて、粒子の隙間がなくなった状態になり、強い抵抗を示す現象である。セメントを練るおけの中で多量の片栗粉を水に溶かした。その上で小学生が足踏みしても沈まないが、足踏みを止めるとゆっくり沈んだ。みな足がドロドロになっても、大喜びしていた。

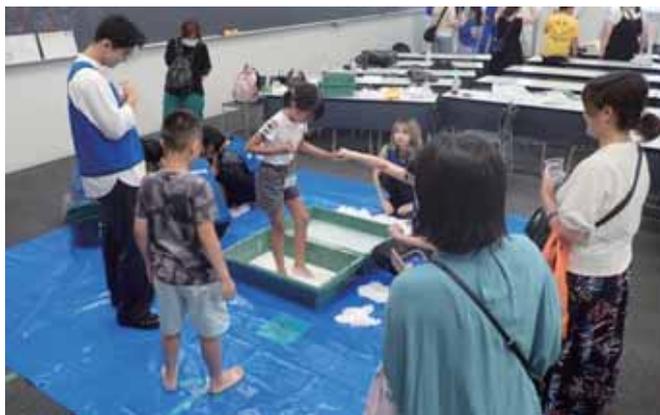


図8. 「例のブツをつかんでみよう！」の様子

(8) ぐにゃぐにゃ輪ゴムを転がそう

担当：小学校コース4年生理科教材研究履修生

概要：遠心力を使って、軟らかいものを転がす

内容：輪ゴムやボールチェーンは軟らかいので、そのままでは転がらない。ペットボトルのキャップに輪ゴムを挟み、高速で回転させ、急停止させると、輪ゴムが飛び出して、遠くまで転がった。できるだけ遠くまで転がるように、回転の仕方を工夫してもらった。



図9. 「ぐにゃぐにゃ輪ゴムを転がそう」の様子

(9) スライムをつくろう

担当：小学校コース4年生理科教材研究履修生

概要：いろいろなスライムを作る

内容：洗濯糊とホウ砂水を混ぜて、スライムを作った。食紅を入れてカラフルにしたり、砂鉄を入れて磁石がくっつくようにして、お土産に持って帰ってもらった。大学生の説明が上手だと、保護者が興味していた。



図 10. 「スライムをつくらう」の様子

## 参考文献

- 1) 神谷純子 (2017) 謎解き図書館リアル脱出ゲーム:「夢の体験教室」における大学施設体験型講座の実践報告. 帝京科学大学地域連携推進センター年報, 1, 61-65.
- 2) 神谷純子・江田慧子 (2021) 子どもの貧困対策における大学の役割. 関係性の教育学, 20, 53-63.
- 3) 米田麻根 (2023) 算数科「概形とおよその面積」を題材とした小学生に対する ICT 教材の提供: 夢の体験教室を利用した地域貢献. 帝京科学大学教育・教職研究, 9, 123-127.
- 4) 植木岳雪・大日向浩・倉山智春・小池守 (2024) 中高理科コースの大学 1 年生による児童に対する 体験型科学教室:2023 年度「夢の体験教室」の実施報告. 地域連携研究 帝京科学大学地域連携 推進センター年報, 8, 22-25.
- 5) 植木岳雪 (2024) 地域連携講座「夢の体験教室」におけるアンケートの自由記述欄に対する計量テキスト分析. 帝京科学大学教育・教職研究紀要, 10, 印刷中.

## 5. 参加者の評価

夢の体験教室に参加した児童と保護者に対して、解散直後にアンケート調査を実施した。アンケート調査項目、及び調査結果とその分析については植木 (2024) に既報であるが、大学生が講師となり児童を教えたこと、児童が楽しく活動できたことについて肯定的な評価が大半を占めていた。2024 年度の夢の体験教室は、地域の児童を対象とした大学の地域連携活動として成功であったことが示されている。ただし、ごく僅かではあるが、時間不足により全ての実験ブースを周回できなかったことについての不満も見られた。

## 6. まとめ

2024 年 8 月 24 日 (土) に、足立区教育委員会と大学との地域連携事業「夢の体験教室」を開催し、大学生が企画・運営した体験活動に小学 4~6 年生 59 名と保護者が参加した。参加した児童・保護者からは高い評価を得ることができ、2024 年度「夢の体験教室」は成功裡に終わった。帝京科学大学による地域貢献や、大学の認知度の向上として、また、学校教育学科の学生による主体的な教育活動の場として「夢の体験教室」は非常に有効であるため、今後も継続する予定である。2025 年度は 8 月 23 日 (土) に開催予定である。2025 年度、学校教育学科中高理科コースには昨年度までより多い 41 名の新生が入ったため、当日の実験ブースの数は増加が予想される。実験までの児童の待機時間が大幅に短縮される一方、体験できない実験ブースの数も増加すると見込まれる。来場者には、全ての実験ブースを周回することはできないことを予め良く周知するなど、不満が生じないよう対策を講じる予定である。

## 謝辞

2024 年度の「夢の体験教室」は、足立区教育委員会の補助を受けて行われた。当日の運営には、足立区の職員の方の協力を得た。本学の中高理科コースの 1 年生、及び小学校コース 4 年生の理科教材研究履修者には、活動の企画と当日の運営をしていただいた。参加児童・保護者には、写真の撮影と使用の許可をいただいた。



# 地域連携活動実践報告





ウマやヤギとのふれあいの場、生き物についての学びの場

REPORT



教員助成

課題

## 馬介在活動センターにおける地域住民対象の活動「ふれあいの日」の実践報告

喜久村徳淑（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

### 目的

馬介在活動センター（以下うまセンター）では、人と動物の関わり方の一つとして馬とヤギを用いた動物介在活動を実践している。月1回の頻度で実施しているイベント「ふれあいの日」は、馬とヤギを介して地域の人々と学生との交流を深めるとともに、生き物に対する学びの場を提供することを目的としている。また、参加学生が活動を通して様々な経験を積み、自身の成長に繋げる事もねらいとしている。

### 内容

うまセンターにおいて飼育している馬4頭、ヤギ1頭を用いて以下のプログラムを実施した。

- 1) 馬やヤギとのふれあい、エサやり体験
- 2) 曳き馬乗馬体験
- 3) 学生の企画による馬具や飼育用具、飼料などの展示やクイズなど

### 成果

4月～3月までの間に12回の活動を行ない、のべ639人が来場した。

引き続き「自分たちの状況に応じたイベント運営」が挙げられる。この活動は学生が主体となって企画運営を行なっている。一人ではできないことでもチームで協同することで実践できることがあると体感することは、学生が活動を通して得られる大きな学びの一つである。

ただし所属学生の総人数は毎年変わり、活動各回の参加人数も時期や個々の事情により変動がある。学年や経験値によっても担える役割には個人差があり、その時のチームで実施できる活動内容には違いが生じる。自分たちの状況を踏まえて実施したいことと実施可能なことを整理し、活動準備をすることに注力していくことが肝要である。それにより来場者も運営側も安全で安心できる活動を継続していくことに繋がると考える。

### 今後の予定

2025年度も月1回程度での開催を予定している。

#### 代表者の感想・コメント

喜久村 徳淑  
（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）



うまセンターでは学生を主体とした様々な活動を行っています。上級生は自分たちが学んできた事を後輩に伝え、後輩は先輩が培ってきたものを受け継ぎつつ、自分たちが主体となって活動していけるように懸命に取り組んでいます。ふれあいの日も、引き続き来場者の方々に楽しんで頂けることを期待しています。



## 地域の子ども達に科学の楽しさを

REPORT



センター  
重点事業

### 成果

「帝京科学の夏まつり」には、毎年、学生サークルや研究室から約20団体が参画し、教職員や学生が協力して運営しています。毎年百数十人の参加者を集めており、楽しみにしてくださっている方が多いと感じられます。2024年は136人の方が参加されました。学生は自分たちが提供するプログラムの提供だけでなく、県教育事務所との事前ミーティング、当日の受付対応、「はじめの会」の進行などにも参画します。このことから学生が事業の企画や運営を経験し、様々な年齢の人とのコミュニケーションを通じてソーシャル・スキルを高めるトレーニングの機会になっています。

### 課題

どの地域連携事業にも言えることですが、学生も教職員も、また県の担当者も常に世代交代などによって顔ぶれが変わっていきますので、毎年の経験を、次年度にどの様に繋げていくかが課題です。各サークル等での「ふりかえり」や、地域連携推進センターが行う年度の報告会などを通じて継承していくことが重要だと考えます。

### 今後の予定

県の担当者と相談しながら、これからも継続されていくことが期待されます。

## 帝京科学大学・地域教育「明日の風」 『帝京科学の夏まつり』

古瀬浩史 (アニマルサイエンス学科/地域連携推進センター)

### 目的

本学で科学を学ぶ学生が、自分たちのそれぞれの専門性を活かして、体験的なプログラムを検討し、地域の幼稚園児・保育所児・小中学生及び保護者等を対象に「科学を学ぶおもしろさ」を発信しています。地域の教育力向上を目的にしたものであると同時に、地域内で大学がより認知されることや、学生の「プロジェクト・ベースド・ラーニング」の機会を生み出すことも目的としてあげられます。

### 内容

山梨県富士・東部教育事務所が設置する北都留地域教育推進連絡協議会と帝京科学大学が協力して主催しています。キャンパスの教室や人材を活用した近隣地域の子どもたちのためのイベントです。教室や学内ミュージアム施設である「ブリコラ」、キャンパス近くのフィールドを活用して、自然観察や科学実験など、多様なプログラムが提供されます。毎年小学校が夏休みに入るタイミングに合わせて行われています。子どもたちにとっては、高等教育機関である大学のキャンパスや教室を訪れたり、大学生とコミュニケーションを取ることの良い経験になっていると思います。プログラムの内容は本学の特徴である動物を題材にしたものが中心に、自然体験や化学的な実験など多岐にわたっています。多くの家族連れが参加し、本学を地域の方にとって頂く機会にもなっています。

### 代表者の感想・コメント

古瀬 浩史

(アニマルサイエンス学科/地域連携推進センター)



日曜日の大学キャンパスに、親子連れの方々が楽しそうにやって来る様子は、とても微笑ましく、地域貢献における大学のポテンシャルを感じます。プログラムを運営する学生の姿も頼もしいです。



## 復活の“大乘馬会”

REPORT



教員助成

### コロナ禍以後初めての大乗馬会の開催

山本大貴（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

障がいのある方のための乗馬会「乗る・馬・体験」実行委員会は、「障がい者乗馬を多くの方に知っていただくこと」、「人と人、人と動物の交流の場を提供すること」、「障がい者乗馬の実施」を目的として運営しています。本学の学生が構成する実行委員会が中心となって、多くの方の協力のもと、2004年の秋から年に数回の障がい者乗馬会を実施してきました。

#### 内容

- ・うまセンターと合同で障がいのある方を対象とした乗馬会の実施
- ・障がいのある方のための乗馬会を実施するためのイベント企画・運営、曳馬乗馬の練習
- ・学内・学外の団体等と協力して、障がい者施設の方を対象とした大乘馬会を実施するための企画・運営

#### 成果

今年度はまず、昨年度に引き続き、何度も来ていただいているリピーターの方を招いた乗馬会を行いました。それだけでなく、今年度はコロナ禍が緩和されたこともあり、本格的な活動を再開して以来の大規模なイベントを開催しました。コロナ禍以前に行っていた「大乘馬会」を復活させるために、多くの学内団体と協力したり、学内の学生や学外の団体にもボランティアとして参加していただいたりして、

ともにイベントを作り上げました。また、その他にも多くの方々のご協力を賜り、来ていただいた対象者とそのご家族の笑顔を引き出すことができました。

#### 課題

まだまだ対象者や協力していただける団体が少ないため、より多くの対象者に参加していただき、より多くの学生団体にも参加していただきたいと考えています。学内外問わず様々な団体、人たちに参加していただきたいです。また、規模を大きくすることに加えてより安全に対象者に楽しんでもらえるように、私たち自身の知識を付け、各所との連携も綿密に行っていきたいと思っています。

#### 今後の予定

今後はイベントを定期的に開催することに加えて、より多くの人たちに関わっていただけるようなイベントになるよう、努めて参ります。今後も対象者に笑顔になっていただけるようなイベントを開催できるように、委員一同邁進していく所存です。

#### 代表者の感想・コメント

山本 大貴  
（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）



今年度はコロナ禍以後初めての大乗馬会を開催し、今までに無く大規模なイベントを開催しました。コロナ禍以前の大乗馬会を知る人も少なく、手探り状態ではありましたが、多くの方々のご協力のおかげもあり、開催することができました。今後も試行錯誤しながら、より良い乗馬会を開催できるように尽力いたします。



共創的な関係性を。「対話」への学びの共有とともに。

REPORT



重点事業

## 「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究推進活動 2024

榑原健太郎（総合教育センター）

### 目的

本事業は「共創的な地域連携推進活動における『対話型教育プログラム』の開発と実践に関する研究推進活動」と称し、本センターにおける「ミッション・ステートメント」及び「帝京科学大学中期目標・計画」の示すところを視野に収めた上で、本学における共創的な地域連携推進活動の創出、及び創出の活動主体の養成・育成等を目指した「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究を推進する事業である。

2024（令和6）年度の活動については、連携・協力機関との日程調整を踏まえつつ、対面方式とオンライン（Zoom）方式とを適宜選択して実施した。

### 内容

- (A) 高校生向けの「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究
- (B) 「地域社会」における「対話型教育プログラム」の活用に関する研究

### 成果

上記「内容」の(A)、及び(B)について、活動成果の概要はそれぞれ次の通りである。

- (A) 高校生向けの「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究
  - 「高校生のための哲学サマーキャンプ 2024」における「哲学の方法としての「振り返り」プログラム」の開発と実践  
日時：2024年8月4日（日）  
会場：Zoomでの開催  
連携・協力機関：東京大学 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）
  - 「高校生のための哲学ウインターキャンプ 2024」における「哲学の方法としての「振り返り」プログラム」の開発と実践  
日時：2024年12月26日（水）  
会場：Zoomでの開催  
連携・協力機関：東京大学 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）
  - 「[日本代表候補高校生向け] 国際哲学オリンピック日本代表高校生選考会の哲学トレーニングにおける「哲学の方法としての各種「対話プログラム」」の開発と実践」  
日時：2025年2月8日（土）、2月9日（日）  
会場：Zoomでの開催  
連携・協力機関：国際哲学オリンピック日本組織委員会
  - 「高校生のための哲学スプリングキャンプ 2024」における「哲学の方法としての「振り返り」プログラム」の開発と実践  
日時：2025年3月27日（木）  
会場：Zoomでの開催  
連携・協力機関：東京大学 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）

(B) 「地域社会」における「対話型教育プログラム」の活用に関する研究

- 「スポーツを通じた人間性教育」と「対話的哲学教育」とを架橋する「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する準備的研究

日時：2024年9月28日（土）、及び2025年2月15日（土）

会場：帝京科学大学千住キャンパス

連携・協力機関：一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー

- 「スポーツを通じた人間性教育」と「対話的哲学教育」とを架橋する「対話型教育プログラム」の実施

活動名：「親子 de ラグビー&哲学対話教室」

日時：2025年3月9日（日）

会場：帝京科学大学千住キャンパス

連携・協力機関：一般社団法人日本スポーツ教育アカデミー

今後の予定

2025（令和7）年度の活動の日程・実施方法については、引き続き連携・協力機関との日程調整を踏まえつつ、社会的な状況・環境等を鑑み、対面方式とオンライン（Zoom）方式とを適宜選択して実施する予定である。

代表者の感想・コメント

榊原 健太郎  
（総合教育センター）



共創的な関係性を、「対話」を通じた「人としての成長、人としての学び」の共有とともに。

課題

上記「内容」及び「成果」に示された通り、多角的な連携・協力関係において、共創的な地域連携推進活動の創出を図る基盤を形成することができた。これらの基盤の上に、更に、創出の活動主体の養成・育成、アフターコロナにおける時代的・社会的な要請への応答、地域社会における各種教育体験機会の創出、社会人の学び直しやリカレント教育といった要素との関わり深めつつ「対話型教育プログラム」の開発と実践に関する研究を推進することを課題として設定したい。



## 愛犬の適正体重を知るきっかけに

REPORT



教員助成

### 談合坂サービスエリアでの愛犬の体脂肪測定会

小泉亜希子 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

近年、室内飼いの犬は増加傾向であり、一緒にいる時間が増えることで犬におやつを与える機会も増加していると考えられる。犬の肥満と疾病の関係も明らかになってきているが、犬の栄養状態を把握している飼い主が少ないのが現状である。そこで、体脂肪測定会を実施することで、飼い主が犬の栄養状態を知る機会をつくり、正しい知識を身につけ、より多くの犬が健康状態を維持できるようにすることを目的とする。

#### 内容

中央高速道路談合坂サービスエリアを利用される犬および飼い主を対象に、犬の栄養相談を実施した。内容としては、問診、体重測定、体脂肪測定、ボディコンディションスコア (BCS) 評価である。また、測定した体重と体脂肪率より、その犬の適正体重を求めた。それらをもとに、犬の栄養・肥満に関する相談会を実施した。また、犬の栄養学に関するパネル展示も実施した。測定終了後には、測定結果と給餌量の計算方法を書いた冊子を参加者全員に配布した。4月と11月の2回開催した。

#### 成果

体脂肪測定会に参加した多くの犬で肥満または肥満傾向がみられ

た。犬の体脂肪率を初めて測定した飼い主の方が多く、自身の予想よりも高い体脂肪率の測定結果に驚かされていた。また、BCS 触診モデルを用い、実際に犬の栄養状態の評価を体験してもらうことでより理解も深めることができた。パネル展示では、食事の種類や選び方、肥満度の評価方法等を展示していたが、それらへの関心も高く足を止める方が多くいた。

#### 課題

今回展示していたパネルへの関心も高く、質問も多く寄せられた。正しい知識と情報を発信できるよう、今後も内容を検討しながら啓発活動につなげたいと思う。また、測定会に参加できなかった飼い主に向けた配布物なども検討していきたいと思う。

#### 今後の予定

犬の適正体重を把握し維持することは、健康で長生きするためにも重要である。今後も様々な場所で体脂肪測定会やパネル展示等を行うことで、適正体重を知るきっかけをつくり、犬のQOL向上のために活動していきたいと考えている。

#### 代表者の感想・コメント

小泉 亜希子

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



犬の体脂肪率の測定が初めての方が多く、測定結果にとっても驚かされていました。このような活動が、愛犬の適正体重を考えるひとつのきっかけになればと考えています。今後も、様々な場所で犬の栄養学に関する啓発活動を継続していきたいと思っています。



2024年9月14日・2025年2月22日 English Dayの様子

REPORT



教員助成

## TEIKA English Day in Senju 実施報告

馬場千秋 (教育人間科学部 学校教育学科)

### 目的

2020年度より小学5年生に「外国語」が教科として導入され、「外国語活動」が小学3年生に開始時期が引き下げられた。本活動 TEIKA English Day in Senju は、このように変動する小学校での英語学習に貢献すべく、足立区の3歳児から小学校2年生までを対象に、2012年度より、COVID-19 感染拡大時を除き、年2回実施している。活動の目的は、本学教育人間科学部学校教育学科の学生が、(1)英語の楽しさを子どもたちに伝えること、(2)小・中・高等学校の教員を目指す学生の英語指導力を向上させること、の2点である。

### 内容

2024年度第1回は2024年9月14日(土)に、第2回は2025年2月22日(土)に本学7号館5階アリーナにて開催した。第1回は10名、第2回は11名の学生が参加した。各回ともに約40名の子どもたちの参加があった。今年度はグループ分けをせず、全体での活動を行う形で実施した。英語の歌やゲームなどの活動を通して、参加した子どもたちが英語学習を楽しむ様子が見られた。

### 成果

来場者にアンケートを行った結果より、ほとんどの参加者が、英語に触れることの楽しさを感じ取っていた。

2024年度に参加した学生の半数以上は、模擬授業や教育実習を経験し

ており、音をしっかりと聞かせつつ、身体を使って英語を覚えるように工夫した言語活動を取り入れるプログラム作成をしていた。学生たちは活動を通して、子どもたちの興味関心を高めるにはどうすればよいか、音から英語を導入し、慣れ親しませるにはどうすればよいかを検討していた。

### 課題

運営上の課題は2点ある。1点目は、活動の中でどの程度英語を使っていくか、ということである。英語の発音についても、参加する子どもたちは敏感なので、気をつけるように伝えているが、学生によっても差がある。2点目は、リハーサル的重要性である。以前、グループ分けをして実施しているときは、教室の飾りつけなどをした後、リハーサルを行っていたが、この2年は言語活動のための準備は不足している。そのため、2025年度に向けて、英語使用とリハーサルを徹底し、よりよい形で進められればと考えている。

### 今後の予定

2025年度も2回、実施する予定である。

### 代表者の感想・コメント

馬場 千秋  
(教育人間科学部 学校教育学科)



English Day を開始してから14年目となりました。グループ分けをしない形でこの数年は運営していますが、取り入れる言語活動に偏っている傾向にあります。子どもたちが英語を楽しく学べるプログラムを作り、運営できるよう、今後も学生たちと検討をしていきたいと思っています。



地域での活動を続けています

REPORT



教員助成

都市部における  
地域セーフティネット構築

楠永敏恵、山田健司、中里哲也、三木良子、浅沼太郎、宮本佳子  
(医療科学部 医療福祉学科)

目的

本活動のねらいは、学生の地域活動によって、少子高齢化が進展する都市部における地域セーフティネットを構築することである。

内容

- ・4月：引き継ぎ会を行った。昨年度活動した3年生から、今年度活動する2年生に、活動の内容や注意事項を伝えてもらった。
- ・4-7月：①高齢者宅への戸別訪問活動(千住便利隊)、②近隣町会での見守り活動(見守り隊)、③サテライト活動として、認知症高齢者グループホームでのレクリエーション、物々交換スペースでの活動、スマホ塾、④かんたんレシピ動画作成及びSNSでの配信などを行った。学生は2名以上で1組となり活動した。
- ・7月：学内で、学生による中間報告会を行った。
- ・9-12月：活動を続けた。
- ・1月：学内で、学生の活動報告会を行った。地域包括支援センターの職員、ケアマネジャー、高齢者の方等にきていただいた。

成果

学生57名が活動に参加した。①千住便利隊では、地域のケアマネジャー等から紹介されて、13世帯の高齢者宅に定期的に訪問した。ほ

かにも依頼があり、数回訪問して、掃除、買い物などを行った。②見守り隊では、1地区を増やして2つの地区で、安否確認や戸別訪問を行った。③サテライト活動では、認知症高齢者グループホームでレクリエーション、地域で物々交換を行う活動の手伝い、商店街でスマホ塾の開催などを行った。④かんたんレシピ動画配信では、ヤングケアラー、単身者、介護者などの方に役立てられるように、高齢者にご協力いただいてレシピを作成し、SNSで配信した。

学生の学びとして、「外出しなくなり、話し相手は旦那さんと限られてしまっているの、学生と話すことで外の様子を伝えることが大事だと思った」「町に継続して訪問することで、対応が変わった時に活動にやりがいを感じた」などが挙げられていた。

課題

後期は「闇バイト」のニュース報道があり、新規地区の見守り隊に対する住民の警戒が強まった。継続することが重要と考えている。

今後の予定

活動を継続し、見守り隊の地区を広げていく予定である。

代表者の感想・コメント

楠永 敏恵  
(医療科学部 医療福祉学科)



活動は2024年度で8年目となります。地域住民や専門職の方にもよく知られるようになり、特徴的な活動になりました。



## 大学資源を活用し知的障害のある人たちと共に創るスポーツ

REPORT



教員助成

### ● 成果

本活動で得られた成果は大きく3つあった。1つ目はスポーツの機会が創られたことである。本学のスポーツ施設を活用し、学生が共に活動をする中で、S0アスリートに安全なスポーツ機会を提供することができた。本年度は従来の陸上競技、フロアボールに加え、3x3バスケットボールを始め、スポーツの選択肢を増やすことができた。2つ目はS0アスリートの健康への関心を高めることができた。3つ目は本活動に参加した学生にとって、障害理解や実践的指導力の育成の機会となった。

### 課題

本活動への学生参画は以前より増えつつあることから、より組織的な運営ができるように、体制づくりに努めたい。

### 今後の予定

体育・スポーツ・健康に関心のある保健体育コースの学生に対して情報発信を継続し、さらなる参画の輪を広げる。また、本活動を教員養成における特色ある取組として位置づけられるようにしたい。

## ユニファイドスポーツで kyo-SO ～知的障害のある人と共に創るスポーツ の機会と健康～

岩沼聡一郎（教育人間科学部学校教育学科）

### 目的

知的障害のある人と知的障害のない人が一緒に活動するユニファイドという枠組みで活動する中で、①知的障害への理解を深めることで、ディプロマポリシーに掲げる実践的指導力の養い、インクルーシブな視点をもつ教員の養成につなげること、②コース教員・学生が有する専門的知識・技能の応用により、スペシャルオリンピックス（S0）アスリートと学生双方の身体的および精神的健康につなげることを目的とした。

### 内容

SON・東京の陸上競技、フロアボール、3x3バスケットボールの練習会に、S0アスリート（知的障害のある人）68名、コーチ16名、本学学生62名が参画した。学校教育学科中高保健体育コースの学生は、S0アスリートと共にプレーをするパートナーとして、一緒に練習を行った。特に専門科目「教職セミナーⅠ」では、共に活動する仲間に必要なふるまいについて、学生個々の気づきを振り返った。加えて、経験豊富なS0コーチが指導し、その補助をする中で、指導方法を学ぶ機会とした。また、学生は体力測定の補助や、S0アスリートの健康増進に向けた啓発資料の作成に参画した。

### 代表者の感想・コメント

岩沼 聡一郎  
（教育人間科学部 学校教育学科）



知的障害のある人たちへ大学の専門性の提供と、多様な児童生徒に向き合う教員養成（学生）という双方に有益な活動であった。



## 長期休園中の動物園を学生参加&オンラインで継続支援

REPORT



センター  
事業

● 成果

### ゆうきフェス@オンライン 2025

佐渡友陽一（生命環境学部 アニマルサイエンス学科）

#### 目的

甲府市遊亀公園附属動物園は2020年10月からリニューアル工事のための長期休園している。本事業では、休園期間中も同園と地域の人々の連携を後押しするため、市民による応援団と本学学生が参加するオンラインイベントを継続的に実施している。

#### 内容

オンラインイベント「ゆうきフェス@オンライン」は令和3年2月に開始し、5回目となる今回は令和7年2月23日に実施した。参加賞のゾウふんペーパーと、クイズ景品の鳥の羽根フォトフレームの作成は学生参加で行ない、特に後者は応援団メンバーの支援を得て実施した。今年度はゾウの行動観察も実施し、その成果の一部はオンラインイベント中でも報告した。この他にも応援団による寄付活動の報告や、動物福祉の向上などへの動物園の取り組みを動画で紹介した。オンラインイベントは本学が契約する zoom ウェビナーを用いて教員がホストを務め、学生、同園獣医師により、同園の紹介とクイズ、参加者からの質問回答を行なった。この際、参加申込のために教員と応援団が共同管理するページを用意し、応援団は寄付募集のためのページも別途、開設した。今年度は行動観察をしたゾウの「テルさん」の前から中継を行い、テルさんが巨大タイヤで遊ぶ様子も見ながら、秋山園長による質問への回答を行った。

ゾウふんペーパーやクイズ作成などの準備作業には延べ12人、鳥の羽根フォトフレーム作成には5名の学生が参加し、当日は3名の学生によりオンラインイベントを実施した。応援団によるFM甲府でのイベント告知も行われ、参加者は接続申込数にして77件となり、住所を登録した先着50件に参加賞を送付した。終了直後からチャットに「楽しかったです！改めて勉強にもなりました」などの声が寄せられた。

#### 課題と今後の予定

オンラインイベントについては動物園や応援団との連携が定着し、安定的に実施できるようになっている。一方、長期休園しながらのリニューアル工事は順調に進んでいるが、令和7年度はゾウを飼いながらゾウ舎のリニューアルを行うという難しい工事を予定しているので、引き続きゾウの観察に取り組んでいきたい。また、新しい施設についてはサイン計画が後回しになっている現状もあり、この点でも本学なりの支援を模索していきたい。

#### 代表者の感想・コメント

佐渡友陽一  
（生命環境学部アニマルサイエンス学科）



コロナ禍ではじめての事業でしたが、動物園の長期休園に対応して再開園まであと2年継続したいと考えています。動物園や応援団との協力関係は確実に進展しているので、三者のwin-win-winの関係を深めていきたいと存じます。



鮎放流・鮎友釣り・鮎飼育・鮎研究

REPORT



教員助成

## TEIKA 桂川ブランドの鮎・マスで地域を活性化する

小出哲也 (総合教育センター)

加賀谷玲夢 (生命環境学部アニマルサイエンス学科)

### 目的

本活動では桂川の鮎文化の継承ならびに持続可能な取り組みを目指し、地域との共創による「TEIKA 桂川ブランド鮎」の開発を中心とした活動を行う。また、本学を「TEIKA 桂川ブランド鮎」開発の研究拠点、ならびに桂川漁協と山梨県水産技術センターとの地域連携のハブ機関と位置づけ、長期的な視野で地域連携活動を行い、本学が積極的に地域振興の核となる仕組みを構築する。

### 内容

本活動は、以下の3項目に沿って活動を進めている。

- ①TEIKA 桂川ブランド鮎の開発 (県水産技術センターとの共同研究)
- ②鮎・マスの放流・釣り事業の活動支援 (桂川漁協との共同事業)
- ③学生釣りサークルReve Sea Fishと連携した釣り活動支援

### 成果

鮎の飼育に関しては、安定して長期間の飼育が可能になってきた。年魚として知られる鮎の寿命は1年だが、我々は、1年6ヶ月間の長期飼育に成功している。このことから、鮎は寿命の研究のモデルとしても有用である可能性がある。来年度は、遺伝子診断を含め寿命の科学的な検討をしていきたい。

学生釣りサークルの参加により、活動③のマス釣り大会に多くの学

生が参加することができた。学生からは「魚の放流や釣り場の整備が楽しかった。」「桂川の放流事業の必要性を痛感した。」と多くの意見が寄せられた。また、暑いさなかの7月20日には、漁協の方々に指導をしていただきながら、鮎の友釣り体験を実施した。鮎の友釣りは、生きた鮎をオトリとして、縄張りをもつ鮎が攻撃してきたところを釣り上げる日本古来の独特の釣法である。鮎の友釣りに参加した学生は、「鮎の友釣りをする人たちの高齢化がすすんでいるため大学生が盛り上げる必要がある。」などの多くの意見が寄せられた。

### 課題

鮎は、水質・温度・酸素濃度管理には細心の注意を払う必要があるが、これまでの取り組みによって鮎の飼育環境が改善されてきた。今後は、成長のスピード、大きさ、寿命といくつかのパラメータに分けて検討していきたい。

### 今後の予定

飼育条件の整備、飼育・繁殖技術の確立、桂川における環境DNAの調査などを継続し長期的な視野で研究を行っていきたい。

### 代表者の感想・コメント

小出 哲也  
(総合教育センター)



学生団体 (釣りサークル Reve Sea Fish) と連携した釣り活動・放流事業支援を開始しました。学生の皆さんの積極的参加をお待ちしています。



## 小学校で穴を掘って、小学生に地層の実物を見せる



教員助成

REPORT

### 足立区内の小学校に対する標準ボーリングコア貸し出しシステムの構築

植木岳雪 (教育人間科学部 学校教育学科) ・

#### 目的

東京都区部の下町低地に位置する足立区は、自然災害に脆弱な地域であり、レジリエントな地域を構築するためには、子どもたちに地域の自然を理解させ、災害時には自ら判断して行動する(自助)力をつけることが重要である。小学校の理科や社会科地理領域では、地層のでき方や平野の地形を学習するが、足立区には地層を観察できる露頭がない。そのため、足立区内における標準ボーリングコアを用意し、区内の小学校へ貸し出すシステムを構築する。

#### 内容

本事業は4年計画の3年目である。2022(令和4)年度は、足立区江北ブロックの鹿浜第一小学校、2023(令和5)年度は、綾瀬ブロックの長門小学校でボーリング調査を行い、小学生に掘削作業を見学させる特別授業を行った。2024(令和6)年度は、竹の塚ブロックの保木間小学校で2025年1月29日(金)にボーリング調査と特別授業を行った。

#### 成果

今回のボーリングコアの深度0~0.81mは盛土、深度0.81~0.95mは水田土、深度0.95~4.50mは後背湿地と河道の堆積物、深度4.50~12.00mはプロデルタ堆積物である。現在、深度4.40mの木片、深

度5.85mの貝化石に放射性炭素年代測定を行っており、今後絶対年代が得られる予定である。

ボーリング掘削作業を見学させる特別授業は、小学6年生の2クラスに対して、45分間で行った。児童の多くはボーリングマシンの構造や動作に興味津々であり、教科書に載っているボーリング調査を実際に見ることができた。また、採取されたコアに触り、軟弱な地盤に驚いていた。

#### 課題

今回は、ボーリングコアを用いた授業実践を行うことができなかったため、2025年度には模式的な学習指導案を作成し、特別授業を行う予定である。また、特別授業に関する定量的な評価を行いたい。

#### 今後の予定

2025(令和4)年度は最終年度にあたり、足立区内の宮城ブロックの小学校でボーリング調査を行い、模式ボーリングコアの採取とコアを使った特別授業を行う予定である。

#### 代表者の感想・コメント

植木 岳雪  
(教育人間科学部 学校教育学科)



小学生が地層の実物を見て、触ってみると、みな素直に驚き、楽しそうです。今は、泥団子や砂山を作って遊ぶ機会もないのでしよう。理科の楽しさを体験しつつ、自分の住んでいる大地の成り立ちを知って欲しいです。大学ならではの地域に貢献する活動を、これからも継続していきます。



## 施設で暮らす子どもたちにつながるの力を

REPORT



教員助成

### R6 年度実績

- 11月3日(日) クリスマス・オリンピックの一環として
- 12月8日(日) ヴィレッジ・マルシェの一環として  
児童養護施設「クリスマス・ヴィレッジ」足立区西新井本町  
各回につき、学校教育学科小学校コース学生2名  
参加児童10名、クリスマス・ヴィレッジ職員

## 地域の児童養護施設と連携したレクリエーション活動の実施

神谷純子 (教育人間科学部 学校教育学科)

### 目的

本活動のねらいは、児童養護施設など、社会的・経済的に不利な環境の中で育つ子どもに、本学大学生と接し、ともに楽しい時間を過ごす経験を提供することである。

過去には区の福祉事業の一環として施設からの大学訪問を学科で受け入れたこともあったが、特に低学年の児童は大学まで出向くことが難しく、非常に限られた参加者での開催となった。学生が施設等に出向くことによって、より多くの子どもの参加が見込まれる。

### SDGs との関係性

本活動は、社会的・経済的に不利な環境の中で育つ子どもの教育に資する活動である。また、参加する学校教育学科(小学校コース)の学生にとって、本活動は、仲間と協働して活動を企画運営する力、子どもたちとコミュニケーションをとる力を鍛錬するとともに、子どもが育つ様々な環境を知り、多様な子どもたちと接し理解するための貴重な機会である。さらには、大学の教職課程において座学で学んだ知識技術を実践知へと昇華する機会としても意義深い。

### 内容・成果

本学学校教育学科(小学校コース)の学生が区内児童施設を訪問し、学生の企画運営によるレクリエーション・フェスタを開催する。

### 今後の予定

足立区は、子どもの貧困対策の一環として大学との連携事業を重視してきており、本活動もその目的に資するものと考えている。また、クリスマス・ヴィレッジの施設職員との打ち合わせでは、足立区で育った施設の子どもたちが、将来足立区に根づき、地域に何らかの貢献ができるようになることを願っていると聞いた。区内の児童養護施設を本学学生が訪問し、つながりをつくっていくことは、これら区や施設が望んでいることと思いを一つにするものであり、今後も積極的な地域連携事業を展開してゆく所存である。

### 代表者の感想・コメント

神谷 純子  
(教育人間科学部 学校教育学科)



社会の主流から外れて生きなくてはならない人びとや子どもたちの人間形成のあり方とその支援が研究のテーマです。場に入り込んで活動に携わりながら、多様性が輝く学びの場を創るための方策を探究しています。地域に根差した活動を大切に。

Think Globally, Act Locally.



クリスマスカードは、あなたを忘れていないというメッセージ

REPORT



教員助成

## おはなしカフェ リハビリテーション相談と家族支援

安齋久美子 (医療科学部 理学療法学科)

### 目的

障害を持ちながら地域で暮らしていくことは、様々な困難が伴う。心身のケアという面だけでなく、社会資源も大変利用しにくい状況がある。たとえば未就学児では、軽度の障害であれば保育園や幼稚園での受け入れは進んできているが、障害が重い場合には受け入れ先を探すのは簡単ではない。障害をもつ全ての子が地域で当たり前で暮らしていくためのサポートは充足していない現状に対し、この活動では子どものリハビリテーションを専門とする理学療法士(活動代表者)が、障害の重さに関わらず利用できるサービスの選択肢を増やし、本人と家族の健康増進を支援するリハビリテーション相談活動を行うことを目的としている。

### 内容

主な活動は、リハビリテーション個別相談会の開催、子ども分野の理学療法士・家族との懇談会、リハビリテーションで繋がりのある子どもたちへクリスマスカードを贈る活動、広報活動である。

### 成果

個別相談は7月、イベントとしての相談会を8月と9月、そしてクリスマスカード作成と郵送、活動についてのリーフレット配布を12月に実施した。個別相談では指定難病の子をもつ母親1名が参加、専門

職(支援者)向けのイベントでは、小児訪問分野の理学療法士、脳性麻痺者の母親および学生が参加して放課後デイサービスで理学療法士が果たす役割についてディスカッションを行った。また9月には障害をもつ子の“親なきあと”について、ある母親の話に耳を傾ける時間をもつことができた。年末には、学生の協力を得てクリスマスカード作成と郵送した。また、上野原市役所にリーフレットを置かせていただくお願いをしたところご快諾いただいた。心より感謝申し上げたい。

### 課題

相談事業は、多人数を対象に話をする形式ではなく、ひとりひとりの個別性を大切に話を聞きとって行く作業であるため、個別相談やイベントへの参加者が限られてしまう。かと言って参加者が多すぎれば対応が難しくなってしまうので、参加人数と内容のバランスが課題である。今年度はイベントに学生が参加したが、数年先の自分たちのリアルな仕事の姿が伝わり、キャリアを考えてもらう良い機会となった。

### 今後の予定

引き続き、継続的に相談会を開催していきたい。

### 代表者の感想・コメント

安齋 久美子  
(医療科学部 理学療法学科)



長年活動していると、協力してくれるメンバーの入れ替わりがあったり、相談場所が広がったりなくなったりとそれなりの変化があります。今年度はゼミの学生さんたちに参加してもらって現場の理学療法士と話す機会を持てたことが収穫でした。



## 子どもたちと学生が触れ合う農業を

REPORT



学生助成

課題

### 大学生による「地域に貢献する農業」

増山太朗 (生命環境学部 自然環境学科)・  
吉川歩希 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

帝科ふぁーむかかしは去年からの活動を引継ぎ、上野原市の子どもたちに農業について知る機会を提供するとともに、野菜を収穫することの楽しさ、その過程の苦難、食事の重要性について学びきっかけを作ることを目的としている。

#### 内容

大学の体育館の南側にある畑を利用して野菜を栽培し、収穫体験を行った。今回は上野原市社会福祉協議会にチラシを配付し、6月にジャガイモ、12月に大根の収穫体験を学習支援教室の子どもたちを対象として行った。ジャガイモは3月11日に植え付けを行い、6月29日、30日の二日間収穫体験を行った。大根は9月23日に種をまき、12月7日に収穫体験を行った。また、収穫体験で子供たちが収穫した野菜を利用して、無人販売で野菜の販売を行った。

#### 成果

収穫体験では、ジャガイモは一組の家族(子ども一人)、大根は二組の家族(子ども二人)が参加し、収穫を体験して農業に触れていただいた。また、無人販売では、ジャガイモは5個入り100円で400円、大根は1本100円で1200円の売り上げであった。

今回の活動を通して、活動の規模について課題があると感じた。畑の範囲に限界があるので栽培規模を広げるのは難しいが、収穫体験の回数を増やすなど、子どもたちが農業について学ぶ機会を増やすことが新たな課題だと考えた。また、収穫体験や無人販売以外にも地域に貢献できる方法を模索することも課題であると感じた。

#### 今後の予定

今後の活動は今までの活動をもとに、新たな要素を取り入れて活動していきたいと考える。収穫体験や無人販売の回数を増やし、今までとは違う形で地域に農業で貢献していくなど、自分たちにできる範囲で、農業で地域に貢献していくことを目標に活動していきたいと考える。

#### 代表者の感想・コメント

増山 太朗  
(生命環境学部 自然環境学科)



今年も何事もなく活動が出来て良かったと感じています。ジャガイモや大根を子どもたちが楽しそうに収穫している様子を見て、来年も収穫体験を行いたいと感じました。来年度は違う品種の栽培などバリエーションを増やしていけるように頑張りたいと思います。



伝えて学ぶ、動物園・来園者・学生をつなぐ教育普及活動

REPORT



学生助成

## 東京都多摩動物公園と 横浜市立金沢動物園での教育普及活動

加藤 颯樹 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

### 目的

○動物園研究部では、学生が主体となって動物園での教育普及活動に取り組んでいる。貴重な動物たちの魅力や生態を、来園者に楽しみながら学んでもらうことで保全に向けた意識を高め、動物園の存在意義を向上させると同時に、学生自身の動物や動物園についての学びを深め、コミュニケーション能力などの技能を習得することで、来園者と動物園と学生の3者にとって有意義な教育普及活動を目指している。

### 内容

○第1、第3日曜日には東京都多摩動物公園でアジアゾウのクイズシートの配布・解説を行い、観察を促し、発見をする楽しさを知ってもらう活動を行った。第2、第4日曜日は横浜市金沢動物園で3種類(オカピ、バク、カピバラ)の動物解説ガイドに加えて、今年から第4日曜日の午後は金沢自然公園みずの谷において、池に生息する生物の調査活動を始めた。

### 成果

○令和6年度の多摩動物公園の活動では、家族連れを中心に1日あたりおよそ60~80枚のクイズを配布し、解説を行った。金沢動物園の活動でも3種類の動物解説ガイドで1日あたり約60人にご参加いただき、ときには大人の方からも質問をいただくこともあった。今年度より新たに始めた池の生物調査は、普段とは異なる形で来園者と接し、環境調査にも携わる試みとなった。

### 課題

○多摩活動はクイズ配布と共に、来園者との積極的な交流やゾウについての深い知識を増やしていく必要がある。金沢活動は解説する場所や言い回しを吟味し、活動内容の改善を図りたい。

### 今後の予定

○多摩動物公園、金沢動物園いずれも内容を改善し、活動を行っていく。学生、来園者、動物園、動物それぞれにとってよりよい活動となるよう取り組みたい。

2024年度 活動回数と参加学生数				
	回数	人数	多摩活動	金沢活動
4月	0回	0人	活動なし	
5月	1回	4人	1回 4人	0回 0人
6月	3回	15人	1回 2人	2回 13人
7月	1回	5人	0回 0人	1回 5人
8月	2回	4人	0回 0人	2回 4人
9月	3回	14人	1回 2人	2回 12人
10月	3回	11人	1回 3人	2回 8人
11月	4回	21人	2回 14人	2回 7人
12月	4回	15人	2回 5人	2回 10人
1月	3回	17人	2回 8人	1回 9人
2月	3回	25人	1回 5人	2回 20人
3月	2回	6人	0回 0人	2回 6人
合計	29回	137人	11回 43人	18回 94人

### 代表者の感想・コメント

加藤 颯樹

(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



助成金の支えによって活動における学生の負担が減少し、存分に活動へ取り組むことができます。動物園での教育普及活動を通じて、伝えることの意義と楽しさを体感できる活動です。沢山のひとに動物の魅力を伝えるだけでなく、教育という分野から様々な学びを得る貴重な経験となりました。



新たな発展を目指して。

REPORT



学生助成

● 成果

## 県立水族館におけるボランティア活動 (水と水の生き物のすばらしさを伝える会 AQUASHIP)

山本伶真 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

### 目的

身近な生態系をテーマとした展示普及活動を展開することで、対象者のみならず参加した学生にも自然への関心や環境保全の意識を喚起すること、自主的な行動のきっかけにすることを活動の目的とした。

### 内容

山梨県南都留郡忍野村にある「山梨県立富士湧水の里水族館 森の中の水族館。」でのボランティア活動には、毎週日曜日、1~4名ほどの部員が参加している。主な作業はバックヤードの飼育管理作業とイベント補助であり、作業終了時には水族館の飼育員さんに最終確認をしていただいている。

一般入館者が入ることができない水槽の裏側であるバックヤードでは、飼育されている生き物の給餌、水槽の掃除、企画展示水槽の準備や生き物の移動など、様々なことをお手伝いさせていただいている。

また、イベントの際の補助として、二重回遊水槽の「餌やり体験」や「ペーパークラフト体験」のスタッフとしても活動している。お客様と直接関わることでできる場合は、来館者を楽しませるコミュニケーションの取り方や丁寧な接客を学べる、学生にとっても大切な機会となっている。

イベント補助としては他にも、水族館が企画した季節のイベントを手伝わせていただくことができた。

### 課題

毎週の活動頻度に対してボランティア参加部員が不足しがちで、必要人数に追いつかないことがあった。このため新入生の活躍する場として継続できるよう、水槽用品や生き物の知識を学ぶ機会を定期的に行い、よりスムーズなボランティア活動につなげたいと考えている。

### 今後の予定

今後は、二重回遊水槽の餌やりイベント中の「水槽や魚の解説」を今後は、ボランティア活動に参加している部員に任せたい予定である。また、水族館側が企画する新たなイベントも計画されている。そのスタッフとして活動することも想定されるため、水族館側やボランティア参加部員同士で情報や反省を共有していけるようにしたい。

### 代表者の感想・コメント

山本 伶真  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年度は AQUASHIP の全体的な活動は活発になり、昨年度に比べて新たな挑戦ができる機会が増えた。それにより、水族館ボランティアの活動頻度に対する人数不足を解消し、来館者に対してのコミュニケーション能力を身につけ、ボランティア活動に参加できるような人材を増やす必要性を感じた。



## 釣りで地域をつなぐ！大学生と地域の連携活動

REPORT



学生助成

### 釣りサークル「Reve Sea Fish」 地域連携活動報告

有賀光洋（生命環境学部 自然環境学科）

#### 目的

本活動の目的は、私たち大学生が釣りや地元の漁業組合の活動に参加することによって、地域活性化や自然環境の保護に貢献することです。

#### 内容

釣りサークル「Reve Sea Fish」は、大学生に釣りの楽しさを伝えるとともに、地域の皆さんとの交流を促進することを目的としています。年間を通して、海釣りや川釣りを企画・実施しています。その中でも特にアユ釣り、マス釣りにおいては、地域の方々との交流が始まりました。

地域連携活動として、桂川のアユの放流活動、マス釣り大会補助に参加しています。桂川は江戸時代から質の高いアユが捕れる場所として知られており、そのアユを守るために地域の方々と協力して活動しています。

#### 成果

##### マス釣り大会補助

3月31日には、上野原桂川で開催されたマス釣り大会の設営準備と運営補助を行いました。大会には県内外から多くの人々が参加し、盛況なイベントとなりました。

#### アユの友釣り体験会

7月20日には、漁協の方々に指導をいただきながら、アユの友釣り体験を行いました。参加者は釣りの難しさを感じつつも、生きたアユを使った釣りの楽しさを実感し、有意義な経験となりました。

サークルメンバーは、イベントの参加・運営補助により地域の方々との交流を深め、釣り体験を通じて自然とのふれあいや地域活性化に貢献できました。

#### 課題

活動が漁業共同組合の高齢者の方々に依存している部分があり、今後の活動の持続可能性を確保するためには若い世代のさらなる参加が必要と考えています。地域の方々との連携を強化し、活動の効果をさらに広げるための新たな戦略を検討していきます。

#### 今後の予定

放流事業やアユ・マス釣りを通じて、大学生と地域の方々との連携を促進していきます。大学生向けの釣り体験の機会を増やすことで地域との交流を深め、上野原の魅力を大学内外に広く伝えていきたいです。

#### 代表者の感想・コメント

有賀 光洋  
(生命環境学部 自然環境学科)



昨年サークルの活動を本格的に始め、新たなチャレンジとして地域の方々との交流を始めさせていただきました。地域の方々との交流は多くの学びを得ることができとても貴重な経験でした。



## 隅田川の堤防の上で星を観る

REPORT



学生助成

● 成果

### 親子むけ星空観望会

長村泰史 (教育人間科学部 学校教育学科)

#### 目的

月や星は小学校の理科で学習するが、東京都区部では建物が密集し、空が明るいので、星空が見えにくい。しかし、帝京科学大学の横を流れる隅田川に沿っては、例外的に広い星空を観ることができる。それを生かして、学校教育学科の植木研究室の活動として、大学近隣の子どもたちに望遠鏡で月や星を観てもらい、天文に興味・関心を持ってもらうことにした。それは、学校教育学科小学校コースの学生が子どもと触れ合うことによって、小学校教員になるための経験を積むことができたり、大学周辺の住民（子どもと保護者）に対して、大学に親しみを持ってもらったりすることにつながるものである。

#### 内容

2024年度は、2024年5月21日（火）、2025年2月5日（水）に星空観望会を行い、それぞれ約40名、約50名の子どもと、ほぼ同数の保護者の参加があった。広報は、大学近隣の集合住宅と町内会の掲示板にチラシを貼ってもらい、小学校2校でチラシを配布してもらった。望遠鏡で観察した天体は、主に月と惑星（金星、火星、木星、土星）であり、2月の会ではオリオン座の星雲（M42）も観察した。

星空観望会は通算8回目を迎え、地域にすっかり定着したようである。子どもも保護者も星が良く観えて喜んでおり、特に月のクレーター、木星の縞と衛星、金星の三日月形に感動していた。小さな子どもにとっては、夜に、「お出かめ」するのは特別感があって楽しそうであった。

#### 課題

星空観望会は夜で暗いので、アンケート調査などの定量的な評価は困難である。星が観えない時に室内で解説を行うなど、天候リスクを回避する方法について、今後検討したい。

#### 今後の予定

2025年度も植木研究室の活動として、「石割り体験会」とコラボして継続する。目標は、あと2回で通算10回である。

#### 代表者の感想・コメント

長村 泰史  
(教育人間科学部 学校教育学科)



地域の方々と一緒に月や星を観察することができました。天体の知識や児童との触れ合い方を学び、教員になる自覚が芽生える機会となりました。来年度以降もこの活動を続けていくので、ぜひ参加してください！！



## 動物と触れ合う時間を科大祭から日常へ

REPORT



学生助成

### ● 成果

### 科大祭の記録 (動物飼育活動部)

杉山佳奈 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

動物を飼育するために必要なエサや活動をする際の道具を購入するための費用に使用する

#### 内容

今年初めて地域連携を申請したということもあり、活動はかなり少なかったです。

いきなり活動の場を設けても、動物にかなりの負担をかけると考え、今年は大祭のみの参加にしました。

科大祭ではウサギ1羽、モルモット2匹、デグー2匹、ハムスター1匹、計6匹とのふれあい活動を行いました。来場者の方が自由にふれあうことができるようトレーニングを重ねました。

一般のお客さんとのふれあいでは、動物を撫でてもらったり、モルモットを膝にのせてふれあったり、エサやり体験を行いました。

初めてのふれあいでしたが、お客さんに楽しんでもらうことができました。モルモット2匹は初めての人前に出ての活動でしたが、自分から足の上に乗ってくれたため、子どもの心をつかんでいました。その結果、「まだここにいたい」「かわいくて連れて帰りたい」など子どもからの感想を多くいただいたため、地域の方に貢献できたと思います。

#### 課題・今後の予定

科大祭以外でなかなかふれあいイベントを行うことができなかつたり、あまり人慣れができていない動物がいたり、課題は多くありました。今後は人慣れのトレーニングを行うとともに、科大祭だけでなく、朝市や他のサークルとともに幼稚園などにも行けるよう協力していけたらと考えています。

#### 代表者の感想・コメント

杉山 佳奈  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年は小さい子にも触れあってもらえるようモルモットを迎え入れたが、人慣れさせるまでにかかり時間がかかってしまい、科大祭にしか出ることができなかったが、科大祭だけでも多くの方に触れ合ってもらえることができ、楽しんでもらうことができ良かった。部員の方もたくさん協力してくれたため、成功させることができた。



## 訪問活動再開



教員助成

REPORT

### 高齢者福祉施設への訪問活動再開 (動物介在活動部)

稲井萌乃 (生命環境学部 アニマルサイエンス学科)

#### 目的

上野原市では高齢化が進んでおり、市民の約3人に1人が高齢者とされている。その状況のサポートの1つとして、2014年、上野原市で内科医をしている上條医師に、地域活性化をねらいとした「上野原市のアニマルセラピー」を提案していただいた。これをきっかけとして、現在の動物介在活動部が創設された。

このような経緯から、私たちは、部の最終目的を「上野原市における継続的な認知症高齢者へのアニマルセラピーの実施」とし、高齢者施設に入居している方々に少しでも喜んでもらうために活動を続けている。

#### 内容

コロナ禍以前は、上野原市内にある地域密着型老人福祉施設「桜の里(社会福祉法人緑水会)」にて、月に4回程度の学生の訪問活動(動物は連れず、学生が入居者の方と会話をしたり、一緒に作業を行う)、2ヶ月に1回の動物介在活動(他団体の協力のもと、イヌや小型哺乳類、カイコなどをつれていき、入居者の方に動物との触れ合いや学生との会話を楽しんでいただく)を行っていた。

2023年10月までは新型コロナウイルスの影響により活動再開が困難であったが、12月より同じ社会福祉法人(緑水会)の袖木長屋にて活動再開となった。コロナ禍以降は動物を飼育していない為、入居者の方と折り紙やお花紙を用いた工作とお話といった活動を継続的にやっている。今年度からは先方のご都合に合わせて形を変え、地盤を固めているところである。

また、コロナ禍あけから、「帝京科学の夏まつり」に出展し、地域の子どもやその保護者に、「科学」や「動物」の面白さを伝える活動も行っており、多角的な活動を視野に入れている。

#### 成果

新型コロナウイルスの影響により、長い間活動が滞ってしまっていたが定期的な訪問活動の土台作りをすることができた。

#### 課題

- 以下の2点があげられる
- ① 施設の入居者に合わせた活動案の立案
- ② 外部からの動物の導入

#### 今後の予定

今後も学生、対象となる方々、動物たちの心身の健康などの安全管理に気をつけて、月1回以上の定期的な訪問活動を行っていきたい。また、動物を飼育している部活と協力して動物の導入も進めていくことや、介在活動にあった動物の適切な扱い方などの勉強会も勧めていきたい。

#### 代表者の感想・コメント

稲井 萌乃  
(生命環境学部 アニマルサイエンス学科)



今年度は、ますます精力的に活動を行いたいと思っているさなかでの振り出しからのスタートなので、はじめは手探り状態だったが、何とかスタートに立つことができ、今度こそ活発に活動を行っていけると良いなと思っています。



## 隅田川の堤防上で石を割る

REPORT



学生助成

● 成果

### 親子むけ石割り体験会

菊澤翔吾 (教育人間科学部 学校教育学科)

#### 目的

岩石は小学校の理科で学習するが、東京都区部には自然の地層が見える崖は皆無である。そこで、あらかじめ代表的な岩石を用意し、大学近隣の子どもたちに岩石をハンマーで割ってもらい、岩石に興味・関心を持ってもらうことにした。この活動は学校教育学科の植木研究室の活動として行い、学校教育学科小学校コースの学生が子どもと触れ合うことによって、小学校教員になるための経験を積むことができたり、大学周辺の住民（子どもと保護者）に対して、大学に親しみを持ってもらうことにつながるものである。

#### 内容

2024年度は、2025年2月15日（土）に石割り体験会を行い、約100名の子どもと、ほぼ同数の保護者の参加があった。用意した岩石は、中学校で習う3種類の火成岩（はんれい岩、閃緑岩、花崗岩）と、見た目が特徴的な2種類の変成岩（黒色片岩、緑色片岩）、堆積岩の石灰岩の合計6種類である。金床の上に岩石の塊を置き、岩石ハンマーで割ってもらった。岩石の破片とラベルをケースに入れて、標本として持って帰ってもらった。また、植木先生に、大型ハンマーで大きな岩石の塊を割ってもらった。広報は、大学近隣の集合住宅と町内会の掲示板にチラシを貼ってもらい、小学校2校でチラシを配布してもらった。

子どもは、石をハンマーで叩いて割るといふ、普段やっではないけな  
いことができることをとても楽しんでた。岩石の種類によって、固  
さや割れ方の違いがあることも気づいていた。保護者は、楽しそうな  
子どもの姿が印象的であったようである。

#### 課題

今回の石割り体験会は通算3回目になり、地域に定着しつつある。  
年々参加者が増えて、今回はとても混雑したので、より広い範囲で展  
開したり、グループに分けて時間差で活動するなどを考えてたい。

#### 今後の予定

2月は公的なイベントがないので、地域の子どもに喜んでもらって  
いる。2025年度も植木研究室の活動として、「星空観望会」とコラボ  
して継続する。

#### 代表者の感想・コメント

菊澤 翔吾  
(教育人間科学部 学校教育学科)



「星空観望会」に続く、植木研究室の恒例イベントとなってい  
ます。普段ではできないからこそ「楽しさ」や「面白さ」が石  
割り体験にはあります。子どもだけでなく大人も夢中になって取  
り組む姿が印象的でした。私たちも地域の方とかわることがで  
き、嬉しく思っています。来年度もぜひご参加ください！

# 地域連携活動紹介

本学では、本書に掲載した活動のほか、様々な活動・取り組みをしております。  
本学ホームページにて紹介しておりますので、是非ご覧ください。

## 2024年（令和6年）度地域連携活動紹介

ホームページ URL :

[https://www.ntu.ac.jp/media/katsudoushoukai\\_R6.pdf](https://www.ntu.ac.jp/media/katsudoushoukai_R6.pdf)



## 編集後記

地域連携推進センター年報『地域連携研究』第9巻の刊行がなりましたことを、ここにご報告申し上げます。ご寄稿いただきました皆様、そして令和6年度の本センターの地域連携事業・活動にご参画・ご協力いただいた全ての方々へ、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

本巻掲載の諸稿が示すように、本センターは、「いのちをまなぶキャンパス」の一角から、大学が持つ「知」のコミュニティと、地域に根ざした「地」のコミュニティをつなぐことによって新たな価値や「つながり」を創り出す事業・活動を通じて、地域社会に息づく大学として地域社会の豊かさの創出に貢献するとともに、実践的な研究や教育の進展に寄与することを謳っております。他方で、これらの事業・活動は、常に変化する社会の本質を捉え、時代の要請に応え得るものであり続けることを目標に据えておりますが、これは、連携・協働するパートナーの方々との不断の対話を必要とするものです。

本巻に結実した成果は、ご協力いただいた全てのパートナーの皆様との信頼関係の賜物であり、本学と地域社会とのより良き「つながり」や「共創共生」の形を問い続ける姿の一端でもあります。本センターが目指すのは、一時的な成果ではなく、変化を恐れず、地域社会と大学が共に豊かに成長し続ける持続可能な地域連携の「生きたモデル」です。

今後とも、本センターの事業・活動への引き続きのご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、小誌の刊行にあたり、編集・査読・校正等に携わってくださった関係者の皆様に重ねて感謝申し上げます。

『地域連携研究』 編集委員長 榊原 健太郎

### 編集委員

古瀬 浩史、橋本 慎治、市ヶ谷 武生、榊原 健太郎、井岡 由美子

### 表紙デザイン

久保田 彩心

---

## 地域連携研究 帝京科学大学地域連携推進センター年報 第9巻

発行日 令和7年12月17日

発行 帝京科学大学

〒120-0045 東京都足立区千住桜木二丁目2番1号

TEL 03-6910-1010 (代) URL <https://www.ntu.ac.jp>

編集 帝京科学大学 地域連携推進センター 年報「地域連携研究」編集委員会

印刷 有限会社 福本印刷所

---

